巻末資料３　みんなで考える会のまとめ

１　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりを考える講演会

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者数
平成 28 年 3 月 9 日（水） 19:00 開始	伊豆市役所土肥支所 ４階集会室	39 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会	
会場参加型　講演 「防災の基本とこれからの防災地域づくり」 東京大学生産技術研究所　加藤孝明准教授	
意見交換	
閉会	

（３）講演概要

１）【「時代の潮流感」の共有】

- 右肩上がりを前提に作られた社会制度を、右肩上がりでない時代に合わせようと思っても修正しきれない、というのが今の状況である。
- 行政機能がどんどん縮み、社会のニーズに対して対応できない隙間がたくさんできている。この隙間を埋めるのは市民しかいないと思っている。
- 右肩下がりの時代にはそれぞれの地域でそれぞれの下り方を考えなければいけない。
- 過疎化や人口減少の問題を抱える土肥の取組みは、日本社会の地域づくりの新しいモデルという位置付けができるものと思っている。

２）【２つの話題】

① 東日本大震災以降の気になる社会の雰囲気
② 地域からすすめる防災まちづくりのポイント

① 東日本大震災以降の気になる社会の雰囲気（２つの「バランスの崩れ」と３つの「至上主義」）

＜２つの「バランスの崩れ」＞

(1) 自助・共助・公助のバランスの崩れ
(2) 問題のバランス感覚の崩れ

＜３つの「至上主義」＞

(1) 安全至上主義
(2) 科学・シミュレーション至上主義
(3) 全国スタンダード主義

② 地域からすすめる防災まちづくりのポイント

＜防災の基本＞

(1) 人間の本質を理解する（人間の本質を理解した上で防災を考える）
(2) 自助・共助・公助のあるべき姿を考える・理解する
(3) 災害のイメージを高める（過去の災害から学ぶ事は重要だが、学びすぎは良くない）

＜防災まちづくりの進め方のキーワード＞

(1) バランス
(2) 壁を越える

（４）意見交換会概要

◆参加者：人口が半分くらいになり、住んでいる人が全然いなくなってしまい、問題があると思う。

→加藤先生：地域課題をきちんとみなさんで共有するということが、スタートラインである。

◆参加者：津波浸水想定の震源地はどこで、どこの範囲でこの津波が起きる想定か。

→伊豆市：南海トラフ巨大地震で、プレート的には駿河湾に近い東側で起きた想定である。

→加藤先生：どれが来るかというのは事前には分からない。しかも震源地が必ずこうなるわけでもない。別々に時差で来るかもしれない。その時差も数年単位の時差で来るかもしれない。それは事前には分からない。

◆参加者：私の住んでいるところは 5 分で浸水し、逃げられない状態になると思う。

→加藤先生：どんなタイプの地震が来るかは分からないが、最悪のケースだけ見ると、揺れ始めたら揺れている中で必死になってとにかく逃げないと助かりにくいという状態である。しかし、現状で何か工夫をすることによってどれくらい時間が稼げるか、というのを見てみたいと思う。

◆参加者：事例であった町会長さんのシミュレーションソフトは、ネットで拾えるとか、たとえばシミュレーションができる状態のソフトがあるのか。

→加藤先生：その地域ごとのデータを入れないといけないので、すぐには準備できないが、データがあればできる。残念ながら津波の計算は入っていないので、土肥ではまだ使えない。

◆参加者：今の浸水は L1 津波か、L2 津波の想定か？L1 のシミュレーションはあるか？

→加藤先生：これは L2 である。

→参加者：たとえばこれから高台移転とかを考えている方がいたら、どのように高台に家を建てたらいいか、ぜひ L1 の方も考えたシミュレーションをお願いしたい。

→加藤先生：L1 も県に行けば恐らくあるのだろうが、問題はすぐに出せる状態にあるかどうかということである。

◆参加者：検討にあたっては、個人的なお宅と地域・企業の方々の考え、特に土肥は観光産業が主力的な位置付けであるので、その主な経営者の考え方なども含めて、地域全体の思いをかもしだしたほうがよい。その際、認識差があると思うので、一度絞り出した後、地域の座談会のようなものを行い、興味関心がそれほど高くない人の考え方もきけるとよい。

（５）まとめ

- 今日のまとめとしては、冒頭に言った、「地域の実態を正しく知る」、「災害リスクを正しく知った上で、前向きに進んでいく」、しかし、前向きにすすんでいく時に、少なくとも「津波防災 VS 地域づくり」ではなく「プラス」である。
- きちんとどう両立をさせていくのかということをみんなで議論しながら共有し、明るい土肥の未来をみんなで、というのをこれから始めていこう、ということを今日のまとめにさせていただきたい。

以上

2 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（WS#1）

（１）開催日時・会場・参加者数

地　区	日　時	会　場	参加者数
土肥	平成 28 年 4 月 18 日（月） 19:00 開始	伊豆市役所土肥支所 ４階集会室	21 名
小土肥	平成 28 年 4 月 25 日（月） 19:00 開始	小土肥生活改善センター	10 名
八木沢・小下田	平成 28 年 4 月 26 日（火） 19:00 開始	伊豆市シニアプラザ	16 名

（２）プログラム

項　目	内　容
開会	
資料説明	伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりに向けて ●津波防災＋地域づくり ●海と共に生きる”上で地域が抱える課題
質疑応答	
津波災害リスク体験	
ワークショップ 「土肥地域の観光と防災のバランスをとるため、どのようなことを考えていかなければならないでしょうか？」	
閉会	

（３）ワークショップ概要

【土肥地区】

まちづくり

１）観光と防災のバランスをとることが重要だ

- 土肥地区は海があってこその土肥であるが、一方で人の命を守ることも重要で、何を優先すべきからバランスが難しい
- 防潮堤の整備により、海水浴場が失われ、地域を維持することが難しくならないか心配だ
- 防潮堤の整備により、土肥地区の主要産業である観光業に影響が出て、生活が維持できなくならないか心配だ
- 防潮堤をつくることで、土肥の観光資源である海と温泉が壊れないか心配だ
- 防波堤が整備されるよりも先に人口減少等によりまちがなくならないかが心配だ
- 防潮堤による観光への影響を検討することが必要だ
- 観光客がいることが前提の計画作りが必要だ
- 観光と防災を両立させた計画策定が必要だ
- 長期的な視点で、観光と防災のバランスを考えていくことが必要だ
- 観光と防災の両立が必要だ
- 観光業者は景観を考え、後背地の住民は自身の家財等の被害を考えるため視点が異なる
- 立場によって意見が異なるので、それぞれの立場のバランスがとれた計画検討が必要だ
- 海岸の景観を残したい

２）今まで親しんできた海と後背地を分断しない防災対策が必要だ

- 防潮堤は必要だと思うが、高さ等の大きさについてはきちんと協議してほしい
- 中浜の中央防波堤のような、高さのある防波堤は恐怖感を感じる
- 防潮堤の設置により、子供たちが海と直接接する機会がなくなるのではないかという懸念がある
- 海岸線の景観を守り、海を壊さない防災対策を検討すべきだ
- 景観に配慮した防潮堤の設置が可能なのか検討してほしい
- 海岸に防潮堤を設置すると、海水浴場がなくなってしまうのではないか
- 海とともに生きる防災対策を検討することが必要だ

３）地域の維持と防災のバランスをとることが重要だ

- 過疎化が進行しないような取組が必要だ
- 防潮堤による住民生活や経済への影響を考えることが必要だ
- 避難路や避難場所の整備が、高齢化や人口減少の影響で進まない

- 地区人口の 50%65 歳以上が占めている前提の中で、5 分以内に全ての人が逃げられる方法を考えなければならない。まずは 65 歳以上の人の分布状況を把握してはどうか。
- どのような町を目指すのかを検討することが必要だ
- 中長期的なスパンで計画を作る必要がある

4）災害リスクの低い居住エリアを確保することが必要だ

- 集落を津波の被害が及ばない高台に移転してはどうか
- 高台に集団移転することが必要ではないか
- 安全を求める世帯は高台移転することも考えられる
- 高台に新たに住宅地を開発すべきではないか

観光

1）観光客の安全を確保することが必要だ

- 浅草と同じように、災害対策を備えた観光地づくりを行う必要があるのではないか
- 災害対策を備えた観光地づくりを行うことは可能なのか検討が必要だ
- 津波時に海水浴客が逃げ込める避難施設が必要だ
- 観光客が避難しやすいまちにすることが必要だ
- 海水浴シーズンに災害が発生した場合に備えた、観光客の誘導方法を検討することが必要だ
- 災害時の観光客の避難方法を検討することが必要だ
- 災害時には観光客が早期に帰宅できるような支援が必要だ
- 土肥金山の避難所は、階段がきつく、資料館裏のスロープは距離が長いため、災害時に観光客が逃げられるか不安だ
- 観光客 2 千人分の非常食や水を備蓄することが必要だ

2）観光客の救助を迅速に行うことが必要だ

- 観光客が被災した場合の、ケア方法を事前に検討しておくことが必要だ

3）観光資源にもなる防災対策を考えることが重要だ

- 津波避難タワーを通常は観光利用することを考えてもよいのではないか
- 施設整備にあたっては、観光の目玉となるとよう留意してほしい

環境

1）生態系への配慮が必要だ

- 防潮堤の設置により、生態系が崩れるのではないかという懸念がある。海の生物への配慮が必要だ

２）避難行動要支援者等への災害時の支援が必要だ

- 高齢者を対象とした、津波に対する意識調査を行い、防災対策に役に立てるべきではないか
- 避難する際、高齢者も逃げやすく、夜も安心して過ごせる避難場所が必要だ
- 津波時に高齢者を安全に避難させることが必要だ
- 高齢者の避難誘導の対策が必要だ
- 津波時に高齢者を避難場所まで誘導する支援が必要だ
- 災害時の高齢者の誘導方法を検討することが必要だ
- 災害時の高齢者への避難対策として、船を配布してはどうか
- 高齢者は素早く高台に移動することが難しいため、４千人が避難できる分の津波避難タワーが必要だ

防災

１）災害リスクはゼロにならない前提で対策を検討すべきだ

- 災害リスクはゼロにならないことを前提に、過疎化が進行しないようできることを検討すべきだ
- 防災対策は段階的に考えていく必要があり、いきなり L2 ではなく、まずは L1 レベルに対応すべき
- 防災ではなく、ある程度被害が出ることを許容する減災の考え方でまちづくりを進めるべきではないか
- 震度６強での地区の被害想定を前提とした議論をすべきではないか
- 避難することで安全が確保されるまちづくりが必要だ
- 防災対策にかけられる費用が限られる中で、何を優先すべきか考える必要がある
- 費用対効果を考えて津波対策を行う必要があるのではないか

２）地震・津波等の災害リスクを住民が認識することが必要だ

- 地区内の危険個所を全住民で把握すべきだ。
- 地区内の危険個所を把握すべきだ
- 津波が来る可能性があることを、全住民がリスクとして認識することが必要だ
- 津波浸水区域内では、津波災害のリスクがあることを認識して生活する必要がある
- 場所ごとに災害時の危険度をあらかじめ示してほしい

３）まずは自分の身を自分で守ることが必要だ

- 災害時には、一人ひとりが自分自身の安全確保を図る必要がある

４）避難を開始できるよう建物等の安全性を高めることが必要だ

- 震度６強の地震が来たら、津波に襲われる前に建物が崩壊するのではないか心配だ
- まずは住宅が潰れないことが最初である。震度６強の地震が来たら、既存の建物の何割が無事なのか検討が必要だ

５）円滑に避難するための施設等の整備が必要だ

- 避難路や避難場所の整備が、市の財政上の理由で進まない
- 避難路の整備が必要だ
- 山沿いの階段を利用した避難路をつくるべきだ
- スマートフォンで利用できる避難アプリを作成し、災害時に観光客が使える避難経路やマップを表示させてはどうか
- 避難場所までのルートを誰もが分かるようにすることが大切だ
- 避難路を（どこに/どのように？）表示してほしい
- 避難場所まで安全に避難できるルートを確保することが必要だ
- 災害時の避難経路をあらかじめ確保しておくことが大切だ
- 避難をする場所がすぐに分かるようなまちづくりが必要だ
- 安全な避難場所へすぐに避難できるようになることが必要だ
- 住民や観光客が適切に避難できる避難路や避難場所が確保することが必要だ
- 災害時に逃げる場所をあらかじめ決めておくことが大切だ
- 津波避難タワーに資する建物をさらに建築する必要があるのではないか
- 地区内の高さのある建物を津波避難ビルとして利用できるようにしてほしい
- NTT の建物を、一時避難所として利用できるよう、市から NTT に交渉してほしい
- 高いビルの無い内陸地にも津波避難タワーを設置することが必要だ
- 既存の建物に外階段を付け、津波避難ビルとして利用できるようにしてほしい
- 災害時の避難対策を充実することが必要だ
- 海岸沿いの市街地の道路幅がとてもせまく、緊急時は通行に不安がある。
- 道路幅が狭いため、緊急時に通行に不安がある
- 家が密集しているので、地震により建物が崩壊して避難路がふさがれるのではないかという懸念がある
- 地震によって建物が崩壊し、避難に影響が出る可能性がある
- 災害時に避難ルートになっている橋が崩壊して、避難に支障が出ることが心配だ
- 夜間に避難場所に移動する場合に、避難路を安全に通行できるかに懸念がある
- 夜の避難は暗いので対策が必要だ

６）主体的な避難への意識を高めることが必要だ

- 自宅から５分以内に５階以上の建物等の高台に逃げる避難訓練が必要だ

７）安全性の確保された避難場所や避難所が必要だ

- 観光と防災を両立するためには、防潮堤の設置ではなく、海岸に津波避難タワーを設置してはどうか
- 松原公園に津波避難タワーを建設してほしい
- 油面の高台に避難場所を整備してほしい
- 避難場所の数をできるだけ増やした方が良い。
- 山沿いに階段を利用した避難場所を複数作る必要があるのではないか

８）多様な避難方法を想定することが必要だ

- 車を利用した避難方法や、要救護者の誘導など、災害時の交通ルールを地区で確立すべきではないか
- 到達時間が短い中でどのように生き残るかを考えた時に、歩車共生を考える必要がある。例えば、歩車共用の道路を整備するなど。
- 災害時に災害時に生き残るための避難路が必要だ
- 避難方法を考えておくこと必要がある

９）地域が助け合う意識を高めることが必要だ

- 災害時には近所同士で助け合うことが必要だ
- 自治会による防災活動が大切だ

10）地区内の支援体制を強化することが必要だ

- 消防団員の多くは、昼間は仕事で地区外に出ており、昼間の活動を担う人が少ない
- 消防団には若い人が少ないため、迅速な活動に不安がある

11）地区内で生き延びるための対策が必要だ

- 災害時のトイレ対策として、マンホールトイレを設置すべきだ
- 災害時にどのように生き残るかの方策を検討すべきだ
- 高校の敷地内に食料等を備蓄すべきだ
- 食料の備蓄は３日分ではなく、７日分必要ではないか
- 災害時の避難所の運営方法を検討する必要がある
- 無事に避難した後の避難所運営方法や被災地の復旧対策を検討することが必要だ

12）地区外からの支援が受けられるようネットワークを強化することが必要だ

- 高台にある消防団のヘリポートを、利用しやすい場所に移設してほしい
- ヘリポート用地を確保することが必要だ
- 災害時に国道が不通になることが予測される
- 海路や陸路を使った復旧のためのネットワークを準備する必要がある
- 土肥小学校を防災対策に有効に使う方法を検討すべきだ

13）地区外からの支援が受けられるよう支援機能を高めることが必要だ

- 救助されるまでにかかる時間により、災害対策は異なるのではないか
- 災害時に土肥が陸の孤島になるのではないかという懸念がある
- 後方支援が必要だ

14）ハードとソフトのバランスを考えて施設整備をすることが必要だ

- 避難を重視したまちづくりとするのか、津波を防ぐことを重視するのかの判断が必要だ

15）津波による被害を減らすためのインフラの強化・管理が必要だ

- 海上で津波対策を行うことも考えられるのでは。
- 津波を防ぐ水門を建設することが必要だ
- 山川両堤防のかさ上げを行うことが必要だ

その他（検討の進め方など）

1）被災後の産業や生活の再建を、あらかじめ検討しておくことが必要だ

- 生き残った人はどれ位の期間でもとの生活に戻れるのかが問題だ
- 復旧活動をどのように行うかを想定しておく必要がある
- 観光事業は、どのくらいで通常のレベルに戻れるかを考える必要がある

2）観光と地域の両方の意向を把握することが必要だ

- 地区や立場により、求める防災対策が異なっている。海岸に近い住民は防潮堤を求め、観光客を相手にする業種の人は反対している

3）計画策定には観光の視点が必要だ

- 観光の観点が入ったまちづくりが検討されるか心配だ
- まちづくりを検討する上で、「観光」とは何かを定義づけることが必要だ

4）総合的な観点で対策の検討を進めることが重要だ

- 防波堤ありきではなく、それ以外の防災対策を考えることが必要だ

５）地域の意向を十分に把握することが必要だ

- 地区で意識調査を行い、数ある対策の中から必要なものを選択し、集中して整備等行うことが必要ではないか
- 住民参加型で計画を議論することは大変大切だ
- 地区のまちづくり活動において、役員を無視し、自分勝手な行動をする人がいて、活動が円滑に進まないことがある
- 地区の合意形成を図ることが必要だ

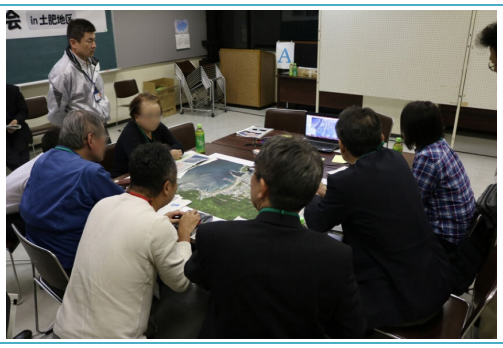
６）まちづくりの中で様々な問題を解決していくことが重要

- まちづくりの中で様々な問題を解決していくことが重要

７）落ち着きながら、スピード感を持って検討を進めていくことが必要だ

- 落ち着きながら、スピード感を持って検討を進めていくことが必要だ

当日の様子【3/9 土肥地区】

A		
B		
C		
D		

【小土肥地区】

まちづくり

1）観光や生活とのバランスのとれたまちづくりをすることが必要だ

- ハード対策よりも景観対策を重視すべきだ

2）今まで親しんできた海と後背地を分断しない防災対策が必要だ

- 防波堤の設置は不要だ

3）地域資源とバランスのとれたまちづくりをすることが必要だ

- 移住促進に温泉を活用してほしい
- 観光や移住促進のために棚田を活用してほしい

4）地域の維持と防災のバランスをとることが重要だ

- 人口が減少しており、30 年後に地区にどれだけの人が残っているかわからない
- 小学生が少ない
- 地区内は若者が少ないので、高齢者が活動の担い手となる必要がある。
- 空き家を移住促進に活用してほしい
- 小土肥は限界集落となる可能性がある
- 被災時に後方支援があっても、その順番は後回しになると思っている

5）災害リスクの低い居住エリアを確保することが必要だ

- 高台に集団移転を検討することも必要ではないか

観光

1）観光客の安全を確保することが必要だ

- 宿泊者の避難対策が必要だ
- 観光客が早期に帰宅できるような対策が必要だ
- 観光客の避難対策が必要だ
- 海水浴シーズンに災害が発生した場合に備えた、観光客の誘導方法を検討することが必要だ
- 海水浴場に避難誘導のための看板が設置されていないのは問題だ
- 民宿のお客さんを対象とした食料の備蓄が必要だ
- 観光客用の食糧等の備蓄が必要だ

環境

1）避難行動要支援者等への災害時の支援が必要だ

- 高齢者が多いエリアなので、高齢者の避難対策が課題となる
- 災害時の避難は子供達を優先すべきではないか
- 避難行動要支援者等の所在は地域で把握している
- 浜地区では、寝たきりの人はほとんどいない
- 高齢者や病人への支援は部落ではできない。個人で何とかしてほしい
- 避難訓練をしているが、高齢者の避難訓練ができていない

防災

1）災害リスクはゼロにならない前提で対策を検討すべきだ

- 過去には大松まで津波が来たという言い伝えがある

2）地震・津波等の災害リスクを住民が認識することが必要だ

- 津波が川を遡上するのではないかという懸念がある

3）防災に対する意識を高めていくことが必要だ

- 女性の防災への認識が低いのではないかという懸念がある。
- 災害対策はそれなりにやってきている
- 40 年前から東海沖地震が来るといわれ、前々から備えている。

4）まずは自分の身を自分で守ることが必要だ

- 自助
- まずは自分の身を守ることを考えなければいけない。生き残れれば他の人を助ける事もできる。

5）避難を開始できるよう建物等の安全性を高めることが必要だ

- 古い家が倒壊すると瓦が落ちるので、道が塞がれ通行できなくならないか心配だ
- 住宅が密集しているため、災害時に周辺の住宅の倒壊に巻き込まれる可能性があるのではないか
- 地震による建物の倒壊が心配だ
- 各戸の耐震化はほぼ終了している
- 家の耐震性を高めることが課題だ
- 家の耐震化を進める必要がある

6）円滑に避難するための施設等の整備が必要だ

- L2 に対しては避難路の整備等の避難体制を整える必要があるのではないか
- 地区内の橋の耐震補強が必要だ
- ブロック塀は耐震性能が向上しているはずだ
- 夜間に避難する場合は、日中より時間がかかるため、LED 街路灯など、避難しやすくする対策が必要だ
- 避難路周辺の建物の耐震化を行い、避難路をふさがないようにすることが必要だ
- 災害時に防災倉庫にたどりつけるか懸念がある
- 市の補助によるソーラー型の避難灯の設置を地域で考えている

7）主体的な避難への意識を高めることが必要だ

- 避難への意識を高める必要がある
- 地震への備えをマンネリ化させないようにすることが必要だ

8）避難時間を確保することが必要だ

- 災害時に津波避難タワーまで 5 分以内に避難できるか懸念がある

9）避難行動のルールづくりが必要だ

- 地震から津波到着まで時間がなく、避難時間を確保することが難しい

10）安全性の確保された避難場所や避難所が必要だ

- 大きな避難場所、避難所がない
- 避難所の確保が必要だ
- 避難所の安全性の確保が必要だ

11）多様な避難方法を想定することが必要だ

- 災害時に安全な場所にたどりつけるのかという懸念がある
- 夜間の避難は不要となる体制が必要ではないか

12）地域が助け合う意識を高めることが必要だ

- 地域間で助け合いの意識を持つことが必要だ
- 観光業に携わる人と、地区の住民が協力し合う必要がある

13）地区内の支援体制を強化することが必要だ

- 昼間は地区に高齢者しかいないことが問題だ
- 地区に若い人がいないので、災害時に俊敏に動けるか懸念がある
- 避難の為助けに行ける若い人がいない

14）地区内で生き延びるための対策が必要だ

- 災害時には孤立することを想定する必要がある
- 各地区で防災への備えがなされているか、確認しておくことが必要だ
- 救助は来ないと思って災害対策をする必要があるのではないか
- 人口が少ないので、災害時の後方支援の順序が後回しになるのではないか
- 被災時に後方支援があっても、その順番は後回しになると思っている
- みかん小屋に避難し、急場をしのぐことも検討してはどうか
- 食料の備蓄が問題だ
- 災害時には３～４日分の備蓄があり、また農作物もある
- 地区には災害対策として一通りの備蓄がある
- 地区内で食糧や水を確保できると思われる
- 災害時に水道の供給が止まることを視野に入れるべきだ
- 災害時には地区内の湧水を利用できるようにしたらどうか
- 昔は川や沢の水を飲んでいたので、災害時に使えないか検討してはどうか
- 各自１週間分の備蓄をする必要があるのではないか
- 家庭で家族分の備蓄をしている
- 不要な毛布を家庭から回収し、災害用に保管してはどうか
- 浜地区ではテントを各戸に人張配布している
- ライフジャケットを各家庭に装備している
- 家のどこに非常用の装備があるかわからない

15）地区外からの支援が受けられるようネットワークを強化することが必要だ

- 災害時用の専用ヘリポートが必要ではないか
- ヘリが着陸できるような場所がないのが問題だ
- 被災後に、船を付けられる場所を確保する必要があるのではないか
- 地区外に続く道路はあるが、山道のため崩壊の危険性がある
- 戸田から続く道は、土肥地区から崩れる可能性があるのではないか
- 災害時に県道が崩れる可能性があるのではないか
- 災害時に道路が通行不可能になるのではないかという懸念がある

16）地区外からの支援が受けられるよう支援機能を高めることが必要だ

- 地区内には備蓄があるが、外からの支援が必要になると思われる
- 建物倒壊による、道路の断絶が心配だ

17）災害時の医療体制の確保が必要だ

- 地区内の医療関係者は、老人ホームに１人しかいないので不安がある
- 災害時にけがをした場合に、適切に治療を受けられるかどうか懸念がある
- 地区内に病院がないため、災害時に適切な治療を受けられるかどうか懸念がある
- 避難中に治療や透析が適切に行われるか懸念がある

18）津波による被害を減らすためのインフラの強化・管理が必要だ

- 地区が津波をかぶった場合に、海水が海に抜ける道がないので、排水対策が課題となるのではないか

19）地震・津波とあわせて土砂災害への対策が必要だ

- 土砂災害が心配だ
- 土砂災害に懸念がある
- 土砂災害も検討対象とすべきだ
- 高台山の裾野では、土砂災害も対象とした方が良い

その他（検討の進め方など）

１）被災後の産業や生活の再建を、あらかじめ検討しておくことが必要だ

- 家庭では、被災後の対応について相談している

２）地域住民との話し合いをしながら計画を策定していくことが必要だ

- L1 に対する対策は、地域の希望を反映させるべきだ。
- 大変有意義な会であった。できたらワークショップの時間、発表の時間をもっと多くとっていただきたかった

３）地域の意向を十分に把握することが必要だ

- 部落ごとに考え方が異なるので、合意形成が必要だ

４）その他

- 民宿６軒で、ピークである夏の１日当たりの宿泊客は 50 人位だ

当日の様子【4/25 小土肥地区】

A		
B		
C		

【八木沢地区】

まちづくり

1）地域の維持と防災のバランスをとることが重要だ

- 10 年後、20 年後の地区での居住の在り方を踏まえた計画づくりが必要だ
- 民宿はほとんど営業していないので、観光のことはあまり考慮する必要はないのではないか

2）地域資源とバランスのとれたまちづくりをすることが必要だ

- 観光よりも水産資源を守ることを重視すべきではないか
- 八木沢地区は観光産業がそれほど盛んでないため、地域住民の避難に重点を置くべきだ

3）災害に強い土地利用のあり方を検討することが必要だ

- 浜区の海抜 0m地帯の浸水対策が必要だ
- 津波対策として 10m 以下の新築については規制をかけていくべきだ

観光

1）観光客の安全を確保することが必要だ

- 観光客の避難誘導が必要だ
- 観光客をどこに避難させたらよいかあらかじめ検討しておく必要がある
- 観光客等、地区外からの来訪者の災害時の対応を検討する必要がある
- 津波が来たときに、観光客をどこに誘導すればよいか検討が必要
- 観光客向けの災害時の備蓄が必要ではないか
- 緊急地震速報を受信し、災害に備えることが必要ではないか

2）観光資源にもなる防災対策を考えることが重要だ

- 安全性を前面に出した観光ＰＲが必要だ

環境

1）避難行動要支援者等への災害時の支援が必要だ

- 災害時には一人暮らしの高齢者への支援が必要だ
- 高齢者が多いため、高齢者の避難対策が必要だ
- 高齢者がスムーズに安全な場所に避難できるよう対策が必要だ
- 親和ホームという老人ホームがあり、災害時の対応が必要ではないか
- 車いすや耳の遠い人、高齢者等、介助が必要な人の避難を補助することは難しい
- 事前に避難行動要支援者等や観光客数の把握や、備蓄状況、避難場所の把握をしておくことが大切だ

２）漁に出ている人の安全を確保することが必要だ

- 災害時に海上にいる人は、船の船長が避難を誘導できるようにすべきだ
- 出漁時に災害が起こった場合の連絡体制を整えておく必要があるのではないか

防災

１）災害リスクはゼロにならない前提で対策を検討すべきだ

- 過去に津波避難タワーの高さを超えた津波があったと聞いている

２）地震・津波等の災害リスクを住民が認識することが必要だ

- 地震で埋立地が地盤沈下の恐れがある
- 津波が引く時間をあらかじめ知っておき、被災後の行動に役に立てるべきではないか
- 浸水シミュレーションには気迫があったので、各地区の集会の時の啓発活動に使ってはどうか

３）避難を開始できるよう建物等の安全性を高めることが必要だ

- 地区ごとに地震による被害を想定し、対策をとることが必要だ

４）円滑に避難するための施設等の整備が必要だ

- 君澤橋に耐震強度があるかどうか確認が必要だ
- 防潮堤より、背の高い建物やタワーを建設すべきだ
- 八木沢地区には高い建物がないため、津波避難タワーの建設は避難場所として有効だと思われる
- 津波避難タワーは、震災時に地面の液状化の影響により倒壊の危険性はないのか
- 皆が車で逃げたら、国道を横断できず、逃げ遅れる懸念がある
- 避難路を設定しておく必要がある
- 避難路の確保が困難な点が問題だ
- 三田地区から大久保に続く道を避難路として整備してほしい
- 避難タワーまでの避難路を整備してほしい
- 論田川付近から避難タワーに向かう道路を整備する必要がある
- 避難場所までの避難路上の危険があるため、避難自体が危険だ
- 避難路指定がされている坂道には、ロープ等の避難を助けるものを設置してはどうか
- 夜間は暗いので避難が難しい。照明を確保したい
- 夜に避難する場合の安全なルートがわからない
- どこに逃げるのかを明確にすべきだ
- 避難所がどこにあるか明確ではない

5）主体的な避難への意識を高めることが必要だ

- 地区全体で避難訓練をすることが必要だ
- 災害はいつ来るかわからないため、夜間の避難訓練を実施すべきではないか
- 夜間に避難訓練をすることが必要だ
- 地区全体で避難訓練をすることが必要だ
- 夜間に避難訓練をすることが必要だ

6）避難行動のルールづくりが必要だ

- 車による避難も検討すべきではないか
- 避難時間を確保するため、歩行と車の両面で避難を考えていくことが必要ではないか

7）安全性の確保された避難場所や避難所が必要だ

- 避難する場所が不明確なのが問題だ
- 広い避難場所が八木沢地区内に必要だ
- 高台に避難場所を整備してほしい
- 避難タワーよりも山に避難すべきではないか
- 各地区で安全な場所を避難場所として明示してはどうか
- 現在の津波の想定では、小学校も浸水する。対応が必要ではないか

8）多様な避難方法を想定することが必要だ

- 自動車での避難を想定する必要があるのではないか

9）地域が助け合う意識を高めることが必要だ

- みんなで助け合って生き残ることが大切だ
- 浸水リスクがあるという意識づくりを地道に進めながら、共助の意識を継続的に高めていくことが重要だ
- 地区内での自助、共助を今後も進めていくので、地区外との共助を今後は進めていくことが必要だ

10）地区内で生き延びるための対策が必要だ

- 災害時には土肥への道路が崩壊する可能性があり、八木沢地区が孤立しても生活できるようにすることが必要だ
- 災害時には道路が寸断され、外部から救援は来ないのではないか
- 災害時に地域が孤立した場合の、地域での生活の維持方法を検討しておくことが必要ではないか
- 土肥、小下田方面の道路が寸断されて、陸の孤島となる危険性がある

- 災害時は道路が寸断されて通行できなくなることを想定すべきだ
- 避難先では、ラジオ体操等を行い、エコノミークラス症候群の防止の取り組みが必要だ
- 備蓄は管理棟にあるが、３～４日分のみとなっている
- 水と食料を、各地区で備蓄している
- 水や食料等の備蓄を、現在の３日分から７日に増やす必要があるのではないか
- 地区内のどこに備蓄があるのか知らない人がいる
- 平六田に長期滞在できる避難場所を整備する必要があるのではないか
- DIG・HUG の講習を実施して頂きたい。
- 発災後は、物資や水・電気の確保や、安全な場所の確保が大切だ

11）地区外からの支援が受けられるようネットワークを強化することが必要だ

- ヘリポート用地を確保することが必要だ
- 孤立した場合に備えてヘリポートが必要ではないか
- 災害時は海上ルートが使えないことを想定しておくべきではないか
- 災害時は漁港に船が着岸できないことを想定して対策をとる必要がある
- 国道以外に幅員の広い道路はないため、国道が寸断されないような対策が必要だ

12）地区外からの支援が受けられるよう支援機能を高めることが必要だ

- 孤立した場合の外部への救援依頼方法を事前に検討しておく必要があるのではないか
- 大久保地区と連携し、災害時に支援を受けられるようにすべきだ
- 八木沢港を災害時の避難港として利用できるように検討してはどうか
- 八木沢港を災害時の輸送基地としてはどうか

13）緊急時の情報把握・伝達の仕組みが必要だ

- 災害時にドローンを活用した被害状況の把握等が必要ではないか
- 被災時は、被災状況の把握や避難場所の状況を把握することが大切だ

14）災害時の医療体制の確保が必要だ

- 地区で医療班を作っている。医療に関する講習会をしている

15）地区外で避難行動要支援者等の避難生活を支えることも考慮すべきだ

- 地区内で長期にわたる避難生活を支える備蓄を行うことは難しいので、地区外での避難生活も想定した方が良いのではないか
- 被災後は避難行動要支援者等を早めに地区外に避難させた方がよい
- 被災後は避難行動要支援者等向けの救援物資を届けるよりも、地区外に避難させた方がよい

16）津波による被害を減らすためのインフラの強化・管理が必要だ

- 用水等の治水対策や見回りは必要ではないか
- 震災時、水門が適切に閉まるようにする必要がある。
- 防潮堤が老朽化しているため、強化が必要だ

17）地震・津波とあわせて土砂災害への対策が必要だ

- 避難場所に指定されている場所のそばで土砂崩れの危険がある。対策を要望している
- 松原の光月院の上の急傾斜地の対策をしてほしい
- 避難場所に指定されている場所は、土砂崩れの危険性が指摘されており危険だ
- 急傾斜地の土砂崩れが心配だ
- 地震と同時に降雨による土砂災害が起こることも想定すべきではないか

その他（検討の進め方など）

1）被災後の産業や生活の再建を、あらかじめ検討しておくことが必要だ

- 被災後の産業や生活の再建を検討しておく必要があるのではないか
- 津波から逃げた後にどのように行動したらよいかわからない
- 被災後にどこで避難生活をしたらよいか明確にしてほしい

2）地域住民との話し合いをしながら計画を策定していくことが必要だ

- 防災やまちづくりについて話し合う場が少ないので、計画の中に話し合いの場を継続的に設けるよう、盛り込んではどうか

3）観光と地域の両方の意向を把握することが必要だ

- 土肥出身者でないものの目線で、気がついたことを伝えていくことも重要だ

4）その他

- 地元の名産品は天草である
- 市道の雑草駆除をしてほしい
- 松原川の上流の倒木が問題だ

【小下田地区】

まちづくり

1）地域の維持と防災のバランスをとることが重要だ

- 30 年後の地区の様子を踏まえた計画とすべきだ

2）災害リスクの低い居住エリアを確保することが必要だ

- 高台移転を検討しておくことも必要ではないか

観光

1）観光客の安全を確保することが必要だ

- 観光客分の非常食準備等は、職場でできるかどうか考えてみたい

2）観光資源にもなる防災対策を考えることが重要だ

- 観光客数分含めた避難場所や備蓄をすることで、伊豆市は安心と PR し、観光を盛り上げることができるのではないか

環境

1）避難行動要支援者等への災害時の支援が必要だ

- 単身の高齢者が古い家に住んでいることが多く、災害時に犠牲になるのではないかという懸念がある

防災

1）防災に対する意識を高めていくことが必要だ

- 防災に関する意識をこれから高めていく必要がある

2）避難を開始できるよう建物等の安全性を高めることが必要だ

- 防潮堤よりも耐震補強を優先させるべきではないか

3）円滑に避難するための施設等の整備が必要だ

- 土肥地区の特性である、家が密集している状況を踏まえた対応が必要だ
- 土肥地区は家が密集しており、家の間の通路は被災後は通れない

4）安全性の確保された避難場所や避難所が必要だ

- 地区内の高さのある既存の建物の耐震補強を、防潮堤の整備よりも優先させるべきではないか。

５）地区内で生き延びるための対策が必要だ

- ライフラインが老朽化しており、災害時に被害を受けるのではないかという懸念がある
- 地区により備蓄状況に差がある。

６）地区外からの支援が受けられるようネットワークを強化することが必要だ

- 災害時に橋が崩落するのではないか心配だ

７）地区外からの支援が受けられるよう支援機能を高めることが必要だ

- 災害時に国道への道が寸断され、外部から孤立するのではないか心配だ

８）地震・津波とあわせて土砂災害への対策が必要だ

- 震災時に土石流が起こるのではないかと心配だ
- 震災時に地すべりが起こるのではないかと心配だ
- 震災時に土石流が起き、道路等が寸断され、陸の孤島になるのではないかと心配だ

その他（検討の進め方など）

１）被災後の産業や生活の再建を、あらかじめ検討しておくことが必要だ

- 瓦礫の処理場を事前に想定しておくことが必要ではないか

２）観光と地域の両方の意向を把握することが必要だ

- 観光業者や一般住民、観光客等の意見を合意させることは困難である

当日の様子【4/26 八木沢・小下田地区】

A		
B		
C		
D		

3 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（市民集会）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者数
平成 28 年 6 月 7 日（火） 19:00 開始	伊豆市役所土肥支所 ４階集会室	73 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会	
みんなで考える会の共有 ●講演会（H28/3/9）の開催報告 ●みんなで考える会（H28/4/18、4/25、4/26）の開催報告 ＜伊豆市より＞	
●みんなで考える会（H28/4/18、4/25、4/26）の成果報告 ＜参加者（各班代表）より＞	
意見交換	

項　目	当日の様子
第１回・第２回協議会の開催報告	
東京大学　加藤准教授 静岡大学　原田准教授 からのコメント	
質疑応答	
閉会	

※講演会、みんなで考える会、協議会の実施内容は、それぞれの開催報告をご覧ください。

（３）質疑応答概要

◆参加者:小土肥や八木沢、小下田では、道路寸断による孤立化は避けられない現実だ。備蓄等の取組の報告には感心した。土肥地区の場合は、道路改良が進められているが、その耐震化はどうなっているか。地震が来たとき、道路がきちんと機能するのか。

→静岡県沼津土木事務所：橋梁の耐震補強を順次進めているが、土肥地区すべてで完了しているわけではない。優先順位を決めて進めている。法面の崩壊により寸断されてしまうおそれがある箇所も、点検と修繕を進めている。

◆参加者：津波が来たときに、防潮堤が今の状態で保持されるのかはわからない。海路も、流出した家財等漂流物が考えられるので、すぐに船が近づける状況になるのか不明だ。早期に大量の物資を輸送できるのは道路だと思う。まず、地域外から土肥地区までの道路の防災対策は、しっかりしてほしい。

◆参加者：県の第四次地震被害想定では、想定死者数 1,400 人という数字が出ているが、昨日テレビで、防災対策によって推定死者数が減ったとのニュースを聞いた。この詳しい情報を知りたい。

→伊豆市：市でもまだ情報は入手していない。次回の考える会等で情報共有したい。

→加藤先生：一般論として、被害想定は計算上の数字である。この「みんなで考える会」では、もっと人の顔が見えるスケールで議論できるはずだ。それが、今ここに集まっていることの意味だ。想定死者数は、何も数字がないと計画や対策を検討しにくいから、たくさんの仮定をおいて計算した、あくまで想定の数字としてご覧いただく方がよい。

（４）開催後に寄せられた主な意見（コメントカード抜粋）

＜災害リスクについて＞

- 最初の浸水シミュレーションは参考になりました。
- 山間地に住んでいるので、土砂災害の事も考えてください。

＜避難について＞

- 地震にしても津波にしても、想定外のことが必ず起きてくると思う。発生時はすぐに的確な情報を隅々まで届けてほしい。現状況、避難の確保地等、地域の住民、観光客に早く知らせる用意も必要。まず命を守る。
- 避難より、生死が先。タワーより防潮堤。
- 昼間に地震が発生した場合、国道等が寸断された場合に、現状の土肥支所でどこまで対応できるか疑問。若い人はほとんど山越えして通勤している。

＜被災後の生活について＞

- 移動式トイレや紙おむつ、生理用品、トイレットペーパー、粉ミルク、燃料等の備蓄も考える必要があるのではないか。
- 陸路が寸断された場合の衣食住の充実について、ヘリポートを利用しての空路、港を利用しての航路の整備が必要だと思う。
- 高齢者が多く若年者が少ないため、被災した時のサポート（心のケア）等、医療と連携がとれるか否か。
- 孤立することを前提に備蓄をしている小峰の事例はとてもすばらしいと思います。
- 被災後の復興のまちづくり計画の必要性も感じました。

＜観光防災まちづくりについて＞

- 観光関係者の出席が少ない。観光関係者がどのように防災を考えているか知りたい。
- 観光だけでいいのか？産業はまだまだあるはずだが。
- 防災を宣伝にして、安心して安全に滞在できる地域であることを商売の種にしたらどうか？

＜みんなで考える会への参加や周知について＞

- 地域住民が集まり、住民同士意見交換することは非常に大切だと思う。
- 市民一人一人が実態を見つめて、できることを考える事に価値を感じる。
- 各地区の問題点を集約して、市民に伝えてください。これで終わらないで、続けていく事が大事です。
- 毎回の会議内容と資料を、参加したくても来られない区民のために、回覧版でまわし、全区民にお知らせしてほしい。

- 各地区の自主防災の担当者、区長等にも参加を促してほしいと思います。
- 7 月のみんなで考える会はできるだけ多くの市民が参加できるように案内等、周知をはかっていただきたい。
- 意見の片寄りがあると思う。老人・子どもたちの意見も伺いたい。防潮堤の議論も伺いたい。
- 若い人の参加が多く、彼らの意見も聞きたいと思いました。

＜計画検討の進め方について＞

- 課題が明確になり、行政・地域市民がなにをすべきか合意形成できつつあるように感じましたので、さらなる絞りこみをすべきだと思います。
- この計画の実施については、市民の行動（理解の上での）が必要であり、行動をおこさせる方策の検討が必要と感じます。
- この会と消防団との繋がりを今後話し合いたい。
- 九州の熊本地震で、地域で被災者を出さずに対応した事例があると聞きました。どのような日常対策を講じたのか資料提供をお願いします。
- HUG・DIG を実施していただきたい。
- 行政なども積極的にやってほしい。

以上

4 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（WS#2）

（１）開催日時・会場・参加者数

地　区	日　時	会　場	参加者数
八木沢・小下田	平成 28 年 7 月 6 日（水） 19:00 開始	伊豆市シニアプラザ	14 名
土肥・小土肥	平成 28 年 7 月 7 日（木） 19:00 開始	伊豆市役所土肥支所 ４階集会室	14 名

（２）プログラム

項　目	内　容
開会	
資料説明	●これまでの検討状況 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画の骨子（案）と基本的な方針（案） ●津波からの避難
津波浸水範囲図の作成	
ワークショップ	●テーマ１「住民の避難体制や観光地の安全確保のため、みなさんが将来にわたりやっていけそうなことは何ですか？」 ●テーマ２「それらを実施するために、行政からどのような支援が必要になりそうですか？」

項　目	内　容
ふりかえり	
閉会	

（３）ワークショップ概要

【八木沢地区】

取組方針：共生する(リスクを理解し、工夫を積み重ねて安全性を高めるエリアの形成)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 自宅等を建て替える際には、災害リスクの少ない場所（高台等）に移転することを考えておくことはできそうだ	● 高台にある空き家への住替えが進むよう、空き家の耐震化等への支援してほしい
● 津波被害のリスクを、多くの住民に周知するための啓発活動への参加はできそうだ	● 津波災害リスクを理解し、防災意識の向上を図るための啓発活動を実施してほしい ● 地区の防災の会合には市の職員が参加する仕組みをつくってほしい
● 避難時に支援が必要な人の名簿づくりや状況を把握することはできそうだ ● 避難時の子供の安全確保について、対策をみんなで考えることはできそうだ	
● 津波浸水区域外へ避難するための避難訓練を個人や地区で実施していくことはできそうだ ● 浸水区域内での避難訓練を通じて、避難所・避難場所の配置についてみんなで考えることはできそうだ ● 訓練をする習慣づけをしていくことはできそうだ ● 車による避難訓練は実施できそうだ	● 実践的な避難訓練を検討してほしい

取組方針：逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 地震発生後にすぐに避難行動に移れるよう、日頃から避難時に必要な用品を準備しておくことはできそうだ	
● 家具の転倒防止対策はできそうだ ● 避難路沿道の建物については、避難時に道路を塞がないよう、建物を耐震化することはできそうだ	● 避難路周辺の建物について、建物の耐震補強制度を拡充してほしい ● 避難路沿道の建物については、避難時に道路を塞がないよう、建物の耐震性を確認してほしい

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 車による避難も想定した避難ルールをみんなで考えることはできそうだ ● 地震後は、まず自分自身の身を守ることを徹底するためのルールを検討することはできそうだ ● 地域における避難ルールを設定し、周知することができそうだ	● 生活時間帯を踏まえ、想定される避難状況を調査してほしい ● 地区ごとの避難マニュアルを作成してほしい ● 地区の実情や住民等の意向を踏まえた避難計画を作成してほしい ● 地震発生後の避難場所をわかるようにしてほしい
● 被害想定の少ない箇所を避難路に設定することや、避難路沿道の耐震化を図り、避難時の安全性を確保することについて検討できそうだ ● 地域で避難路を管理することはできそうだ ● 夜間の避難に備え、懐中電灯の光を反射する反射板を地区内にとりつけることはできそうだ ● 避難ルート上に夜間の避難用の誘導灯をとりつけることはできそうだ ● 夜間に被災した場合に、避難路の足元の状況が分かるよう、停電時にも点灯する外灯を設置することはできそうだ ● 避難ルート上に支障となるものがないよう清掃活動をすることはできそうだ ● 災害時に道路が塞がれないよう、ブロック塀や石垣を耐震補強することはできそうだ ● 道路が液状化することを想定した避難方法をみんなで考えることはできそうだ	● 君沢橋等の橋梁の耐震化をしてほしい ● 佐藤医院前等の橋梁の耐震化をしてほしい ● 大川橋等の橋梁の耐震化をしてほしい ● 避難路の傾斜の大きい箇所については、手すりやロープを設置してほしい ● 地区内各地から避難場所に向けた避難路を整備してほしい ● 歩行者と車どちらでも避難可能な避難路の整備について検討してほしい ● 避難所や避難ルート上に設置する照明の材料を支給してほしい ● 観光客が災害時に迅速に避難できるよう、避難場所や避難路の表示板を設置してほしい
● 地震時に避難路が使えるか安全性を確認することはできそうだ ● 地震時に避難路が使えるか周辺の建物倒壊の危険性を確認することはできそうだ ● 地震時の避難路と避難所を確認することはできそうだ ● 地震時の避難所・避難場所や、避難ルートを確認することはできそうだ	

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 高齢者が迅速に避難できるよう、リヤカーや車いす等の避難を補助する道具を備蓄することはできそうだ ● また、平時にはそれらの備蓄品を管理することはできそうだ	
● 高齢者を車で避難させる時の運転はできそうだ ● 高齢者の避難に必要な車いす等の用具を準備することはできそうだ	

取組方針：生き延びる(地域が早期復旧するための支援機能の向上)に関る対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 被災後に重機が使えないことを想定した復旧活動を検討することができそうだ ● 地震発生後の時間経過に応じた避難所・避難場所を確認しておくことはできそうだ ● 避難が長期化した場合の避難所等について行政と一緒に検討することはできそうだ ● 災害時に救助や医療用のヘリが地区内に着陸できるよう、農地のヘリポートとしての利用を検討できそうだ	● 地区内の避難場所の安全性を確保するため、必要な調査を実施してほしい ● 避難が長期化した場合の避難所等を検討してほしい ● 公民館等の被災後の避難生活をおくることができる施設の整備を検討してほしい
● 地区内の各ブロックの避難場所をみんなで考え、決めておくことはできそうだ ● 避難所に食料やテント、毛布やタオル、簡易トイレ、飲料水といった非常用物資や、発電用の機材等の備蓄を進めることができそうだ ● 避難場所の照明を取り付けることはできそうだ	● 丸山公園等の地区内の避難所・避難場所の安全性を調査してほしい ● 避難先となる施設に非常用の備蓄用品を配備してほしい ● 災害時の飲料水を確保するため、地区の上水を供給するタンクに停水弁を設置してほしい ● 災害時に 2 次避難所等で水を利用できるよう上水タンクを整備してほしい ● 避難した人が寝泊まりするテント等の物資の提供や場所の確保について検討してほしい
	● 幹線道路について耐震補強の対策を検討してほしい

その他

- 車での避難は避難路を閉塞するため、注意が必要だ

【小下田地区】

取組方針：逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)に関する対策

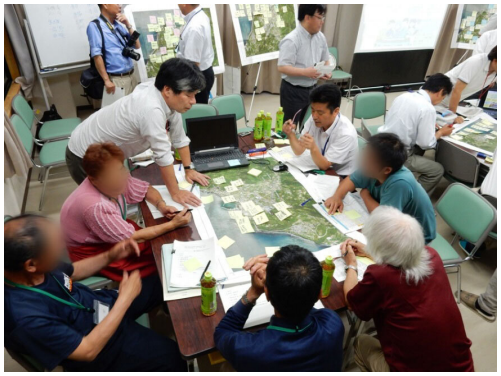
住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
	● 高台への（広域）避難場所の整備を検討してほしい

取組方針：生き延びる(地域が早期復旧するための支援機能の向上)に関する対策

住民等でできそうなこと　行政からの支援が必要なこと

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
	● 孤立が想定される小峰、米崎等の地区への進入路の安全を高める方法について検討してほしい

当日の様子【7/6 八木沢・小下田地区】

A		
B		
C		

【土肥地区】

取組方針：共生する(リスクを理解し、工夫を積み重ねて安全性を高めるエリアの形成)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 家屋が密集するエリアについて、まちづくりのあり方をみんなで考えることはできそうだ	
● 地区外から勤務している人たちの力を活用した地区における防災教育や防災活動を行えそうだ ● 中学校がコミュニティスクールの導入を検討しているので、地域と協力した防災教育が検討できそうだ ● 地震後は、まず自分自身の身を守ることを徹底することのルール化を検討できそうだ	● 中学校がコミュニティスクールの導入を検討しているので、地域と協力した防災教育を検討してほしい
● 日中や夜間等、状況を変えた避難訓練を実施できそうだ ● 震災時の状況に合わせて避難できるよう、複数の避難ルートを設定し、避難訓練を実施できそうだ ● 津波から身を守るため、地区における各種の防災活動を行うことができそうだ ● 防災訓練を通じて避難ルートを確認することはできそうだ	
● 地区内のこども園の園児が迅速に避難できるよう、地域と連携した対応を検討できそうだ ● 避難時に介助が必要な人に対する支援についての対応を明確にできそうだ ● 普段から地域の人たちとおつきあいしておくことはできそうだ ● 地区間で災害時に連携できるよう、予め連携方法等を検討できそうだ	

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 災害時の備えを観光資源として積極的にPR することができそうだ ● 災害時の備えを観光資源として積極的にPR し、避難訓練付ツアー等の開発を検討できそうだ	

取組方針：逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)に関る対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 地震発生後にすぐに避難行動に移れるよう、日頃から避難時に必要な用品を準備しておくことはできそうだ	
● 家具の転倒防止対策はできそうだ ● 震災による建物崩壊から居住者を守るため、建物の耐震化について検討できそうだ ● TOKAI-0 を活用した地区内の建物耐震化の啓発活動を行うことができそうだ	
● 海に面している地区の液状化の危険を考慮した避難路や避難方法の検討ができそうだ ● 地区内各所に設置されている避難場所間で、災害時に連携できるよう、予め連携方法等を検討できそうだ	● 避難場所間の連携ができるように通路を確保してほしい ● 地区内に分散して備蓄されている物資を、避難所間で有効に融通しあう方法を検討してほしい
● 避難路沿道の建物については、避難時に道路を塞がないよう、建物の耐震化を検討できそうだ ● 災害時に道路が塞がれないよう、ブロック塀や石垣の耐震補強を検討できそうだ ● 密集市街地において、建物の不燃化を検討できそうだ ● 夜間に被災した場合に、避難路の足元の状況が分かるよう、停電時にも点灯する外灯の設置を検討できそうだ ● 避難所に容易に逃げ込めるよう、避難所の入口の整備についての検討はできそうだ	● 避難場所までの避難路を整備してほしい ● 避難路のうち、傾斜の大きい箇所については、手すりやロープの設置をしてほしい ● 避難場所になっている中学校校庭に素早く避難できるようにスロープ等の設置をしてほしい ● 災害時に周辺に被害を及ぼす恐れのある老朽住宅や空き家等に対する対応を検討してほしい ● 倒壊の危険性がある住居や空き家の耐震化について、地域の話し合いだけでは解決することが難しいので、行政から指導してほしい

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 観光客が災害時に迅速に避難できるよう、避難場所や避難路の表示板の設置を検討できそうだ	
● 1 次避難所、2 次避難所、それぞれの役割と機能の検討ができそうだ ● 避難所に食料やテント、毛布やタオル、簡易トイレ、飲料水といった非常用物資や、発電用の機材等の備蓄を進めることができそうだ ● 地区内に分散して備蓄されている物資を、避難所間で有効に融通しあう方法をみんなで考えることができそうだ ● 避難タワーとなる施設に毛布やタオルといった非常用物資や飲水の備蓄を進められそうだ ● 避難所である中学校に、非常食等の備蓄を進められそうだ ● 観光施設において、防災訓練のメニューに津波避難訓練も実施するよう働きかけたい ● 観光関連業者が、事業者が所有・利用する建物の高いところに、観光客用の備蓄倉庫を設置するよう呼びかけていくことはできそうだ	● 地区内の避難場所の安全性を確保するため、必要な調査を実施してほしい ● 災害時に避難場所等で電気が使えるよう、発電機等の備蓄を支援してほしい ● 避難所に備蓄倉庫が設置されるよう、備蓄倉庫のあり方の検討や移動を支援してほしい ● 学校に備蓄倉庫を設置する場合、学校に教員等が不在でも地域で利用が可能となるように、運用方法を検討してほしい ● 避難所である中学校に教職員等がいない場合でも、避難所としての活用が可能となるよう、予め中学校と連携し、避難所としての活用方法を検討してほしい ● 地区内各所に設置されている避難場所間の、災害時の連絡用の機材の設置を支援してほしい ● 既存の高層建築物の津波避難タワーとしての利用を促進してほしい ● 避難所に食料やテント、毛布やタオル、簡易トイレ、飲料水といった非常用物資や、発電用の機材等の備蓄を進めてほしい
● 迅速な避難が難しい世帯に生き延びるためのライフジャケットの設置を検討できそうだ ● 迅速な避難が難しい世帯や地域に対しに生き延びるためのゴムボートの設置ができそうだ	● 迅速な避難が難しい世帯や地域に対しに生き延びるためのゴムボートの設置を検討してほしい
● 地震時に避難路が使えるか安全性を確認することはできそうだ ● 地区において避難した住民が確認する避難台帳の準備はできそうだ	

取組方針：生き延びる(地域が早期復旧するための支援機能の向上)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 避難が長期化した場合の避難所等の検討することはできそうだ ● 避難が長期化した場合の避難所として、学校の活用について検討することはできそうだ ● 避難所である中学校に教職員等がいない場合でも、避難所としての活用が可能となるよう、予め中学校と連携し、避難所としての活用方法を検討できそうだ ● 中学校に災害時にヘリポートが設置できるよう、中学校と地域で予め協議等を進められそうだ ● 大藪・中浜地区においては、震災時に孤立することを想定して、備蓄や避難所の運営方法を検討できそうだ	● 震災時に孤立することを想定して、外部からの支援計画を検討してほしい ● 避難所で中高生が活躍できるよう、避難所運営マニュアル等の検討をしてほしい ● 避難が長期化した場合の避難所として小学校を活用する場合に備え、予め備蓄倉庫を設置するようにしてほしい

取組方針：守る・減らす(地震・津波・土砂災害による被害を少しでも減らすための防災・減災対策の推進)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
	● 津波被害の軽減に向け、山川の護岸の嵩上げを検討してほしい

【小土肥地区】

取組方針：共生する(リスクを理解し、工夫を積み重ねて安全性を高めるエリアの形成)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● ライフジャケットを準備しておくことはできそうだ	● 津波に強い建物とするための支援方法について検討してほしい ● 津波避難救助艇（ライフカプセル）等の補助について検討してほしい
● 震災時の状況に合わせて避難できるよう、複数の避難ルートを設定した避難訓練は実施できそうだ	

取組方針：逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 家具の転倒防止対策はできそうだ	● 地区住民が住宅の耐震化に取り組みやすくなるよう、補助金やルールの見直しをしてほしい
● 地域で避難路を管理することはできそうだ ● 夜間に被災した場合に、避難路の足元の状況が分かるよう、停電時にも点灯する外灯の設置を検討できそうだ	● 夜間に被災した場合に、避難路の足元の状況が分かるよう、停電時にも点灯する外灯を設置してほしい ● 避難路のうち、傾斜の大きい箇所については、手すりやロープの設置をしてほしい ● 災害時に迅速に避難ができるよう、案内板や避難路等の誘導表示の設置をしてほしい
● 観光客の避難誘導への支援について考えることはできそうだ	

取組方針：生き延びる(地域が早期復旧するための支援機能の向上)に関する対策

住民等でできそうなこと	行政からの支援が必要なこと
● 地区内の備蓄倉庫を避難場所に移動したり、新たに新設することはできそうだ ● 避難所に、数日間の生活に必要な物資を備蓄しておくことはできそうだ ● 避難の長期化を見据えた非常用物資の備蓄計画を策定できそうだ	● 観光客が災害時に逃げ込める避難場所を確保してほしい ● 災害時に観光客が利用できる物資の備蓄を進めてほしい ● 地区全員分の物資の備蓄を確保できる倉庫を設置してほしい
	● 震災時に孤立することを想定して、外部からの支援計画を検討してほしい
	● 病人の疎開先について検討してほしい ● 高齢者の疎開先について検討してほしい

その他

- 地域づくり協議会を活用したまちづくりの担い手づくりができそうだ

当日の様子【7/7 土肥・小土肥地区】

A		
B		
C		

5 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（WS#3）

（１）開催日時・会場・参加者数

地　区	日　時	会　場	参加者数
土肥・小土肥	平成 28 年 7 月 20 日（水） 19:00 開始	伊豆市役所土肥支所 ４階集会室	12 名
八木沢・小下田	平成 28 年 7 月 21 日（木） 19:00 開始	伊豆市シニアプラザ	10 名

（２）プログラム

項　目	内　容
開会	
資料説明・質疑応答	●これまでの検討状況 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画の骨子（案）と基本的な方針（案） ●観光防災まちづくりの実現に向けたハード・ソフト対策（案）
ワークショップ	●テーマ１「観光防災まちづくりのための対策を実施するにあたり、心配なことや気になることがありますか？」 ●テーマ２「観光地の安全確保や長期的な視点での安全安心まちづくりのため、みなさんが将来にわたりやっていけそうなことは何ですか？」
ふりかえり	
閉会	

（３）ワークショップ概要

【土肥地区】

共生する(リスクを理解し、工夫を積み重ねて安全性を高めるエリアの形成)

●対策

＜自助・共助＞

- 災害時の避難呼びかけ等のための消防車を活用した訓練することはできそうだ
- 自分の避難の能力に応じた居住のあり方を各人で考えるように促すことはできそうだ
- 地域では、「組」組織で防災対策を検討していくこととした場合、組長会などを活用して、各組からの意見を地域の意見として取りまとめることができそうだ

＜公助＞

- 地域では、「組」組織で防災対策を検討していくことができるが、組間の意見のとりまとめや共有を、市に補助してもらいたい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 夜間の避難訓練においては、停電によって外灯が消えていることも想定する必要がある
- 避難訓練を行うにあたっては、地区の状況を反映したリアリティのある内容となるよう留意する必要がある
- 避難困難地域は地域の実態を反映して算出すべきだ
- 小さなテーマで良いから、地域で継続的に議論を繰り返すことで防災力を向上させていくべきだ
- 「組」組織などを活用し、地域の小さな単位で多くの人が参加して具体的な議論を重ねることが重要だ
- 地域の中で顔の見える関係を築き、即地的で現実的な議論をすることが重要だ

＜公助＞

- 避難のあり方や対策の是非について、地域で意見が分かれているが、様々な立場の人全員おおが意見を言いやすい環境を、市としても作るようにしてほしい
- 防災意識向上や防災関連イベントの案内などに、防災無線を活用すべきだ

＜その他＞

- 賞味期限切れが近い非常食を参加者に配布する等、防災訓練への継続的な参加を促すよう留意する必要がある
- 居住者の高台移転を促す場合には、土肥地域からの流出について留意する必要がある
- 居住者の高台移転を促す場合には、居住意向が高まるような施策の導入について検討してほしい

●その他

- 地区の津波被害の想定を理解し、被害があることを意識して日常生活を送ることが必要だ
- 皆がリスクを正しく把握したうえで、防災意識の向上を図ることが必要だ
- 災害リスクを想定できるようになることが必要だ
- 土肥地域全体として防災意識の向上を図ることが必要だ
- 高台に住まいを移したくても、移転は容易ではない

逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)

●対策

＜自助・共助＞

- 各住民が自分の避難方法について考えることはできそうだ
- 各家庭の避難マニュアルを作成することはできそうだ
- 地震発生後にすぐに避難行動に移れるよう、日頃から避難時に必要な用品を準備しておくよう呼びかけをしていくことはできそうだ

＜公助＞

- 自主防災組織が使用できるサイレン広報施設の整備について検討してほしい
- 各家庭で避難マニュアルを作成するためのフォーマットを作成し、配布してほしい
- 各家庭で作成した避難マニュアルを確認・評価する仕組みづくりをしてほしい
- 被災した観光客が、自宅に早めに帰れるよう、災害時の観光客の地区外への輸送手段を検討してほしい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 浸水想定区域外の地域住民についても防災意識の向上を図るよう留意する必要がある
- 自力で避難できない人たちが、どのように避難し生き延びるのか、各自で考える機会を持つことが必要だ
- 顔の見える地区の単位で、避難の方法を考えるべきだ

＜その他＞

- 行政は地区の細部まで把握することは困難なので、各家庭で作成した避難マニュアルを参考にできるとよい
- 「組」組織などを活用し、地域の小さな単位で多くの人が参加して具体的な議論を重ねることが重要だ

●その他

- 自力での避難を諦めている人にどのように対応していくかが課題だ
- 行政は地区の細部まで把握することは困難
- 避難行動要支援者への対応を検討することが必要だ
- 短時間で避難することが必要だ

生き延びる(地域が早期復旧するための支援機能の向上)

●対策

＜自助・共助＞

- 震災直後に孤立することを想定して、備蓄や避難所の運営方法を検討しておくことはできそうだ

守る・減らす(地震・津波・土砂災害による被害を少しでも減らすための防災・減災対策の推進)

●対策

＜公助＞

- 山川の護岸整備について検討してほしい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 防潮堤建設の是非を早く判断するために、地域のたくさんの意見を集めることが重要だ

＜公助＞

- 防潮堤建設の是非は、地域で十分議論し調整することが必要だ

＜その他＞

- 防潮堤の整備にあたっては、十分な調査を行った上で、合意形成を図りながら検討を行ってほしい
- 港湾施設や河川施設の整備に係る計画策定にあたっては、地区のさまざまな人が議論に参加できるようにする必要がある
- 防潮堤建設の是非については、地域で意見が分かれているが、様々な立場の人全員が意見を言いやすい環境を作って議論すべきだ

その他

●対策

＜自助・共助＞

- 観光防災まちづくりに関して地域で継続的に議論する枠組み（組織）を作ることができそうだ

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 「組」組織などを活用し、地域の小さな単位で多くの人が参加して議論を重ねることが重要だ

＜公助＞

- 各地区の状況にあわせた対策について、行政側でもやれるところから順次対応していくようにしてほしい

＜その他＞

- 各地区の防災対策を可能な限り早く実現するため、市が積極的・主体的に、各地区の意見をまとめる作業を進めることが必要だ

【小土肥地区】

共生する(リスクを理解し、工夫を積み重ねて安全性を高めるエリアの形成)

●対策

＜自助・共助＞

- 東日本大震災時に、津波に飲み込まれた人をそのように救出したかを勉強し、課題を整理して地区の防災に活かすことはできそうだ
- 震災後にどのように行動すれば良いのか、予め地域で勉強することはできそうだ
- 小土肥全体やそれぞれの地区毎に予め地区防災計画を策定しておくことはできそうだ

＜公助＞

- 東日本大震災後にどのような復旧、復興が行われたかを十分に情報提供してほしい
- 震災時の液状化に備え、地盤の液状化に関する調査をしてほしい
- 小土肥の住民が浸水想定エリアを把握できるよう、啓発活動を十分に行ってほしい

逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)

●対策

＜自助・共助＞

- 登下校時に災害にあうことを想定した避難訓練を実施できそうだ
- 避難所として地区内の小中学校の活用することができそうだ
- 避難所として地区内の小中学校を活用するために、普段から小中学校と地区の連携を深めることができそうだ
- 観光施設において、防災訓練のメニューに津波避難訓練も実施するよう働きかけたい
- 地区内のホテルを、住民が利用できる津波避難ビルとした訓練ができるよう働きかけたい
- 津波避難救助艇（ライフカプセル）等の各家庭への設置を検討することはできそうだ
- 一人暮らしの高齢者が災害時に津波避難救助艇（ライフカプセル）等に一人で避難できるよう、避難訓練を実施することはできそうだ

＜公助＞

- 登下校時に災害にあうことを想定した避難訓練を実施してほしい
- 観光客が災害時に迅速に避難できるよう、避難場所や避難路の表示板の設置を検討してほしい
- （旧）象牙美術宝庫及び農村公園を避難所として活用を検討してほしい
- 農村公園に災害時のヘリポートの設置を検討してほしい
- 津波避難救助艇（ライフカプセル）等の各家庭への設置を助成してほしい

●**対策実施において気になること、心配なこと**

＜自助・共助＞

- ライフジャケットの着用が習慣づくようにすることが必要だ

生き延びる(地域が早期復旧するための支援機能の向上)

●**対策**

＜自助・共助＞

- 浸水想定エリアの住民とそれ以外の住民との、災害時の協力体制を事前に検討することができそうだ
- 入屋地区で、避難所にテント等の非常用の備蓄を進めることはできそうだ

守る・減らす(地震・津波・土砂災害による被害を少しでも減らすための防災・減災対策の推進)

●**対策**

＜公助＞

- 災害時に備え、堤防の嵩上げを検討してほしい

●**対策実施において気になること、心配なこと**

＜自助・共助＞

- 防潮堤のかさ上げが可能となるよう、観光事業者と地区が合意形成を進めてほしい

当日の様子【7/20 土肥・小土肥地区】

A		
B		
C		

【八木沢地区】

共生する(リスクを理解し、工夫を積み重ねて安全性を高めるエリアの形成)

●対策

＜自助・共助＞

- 高齢者に対して危険の周知をすることはできそうだ
- 各自の家で避難艇などのシェルターの配備を考えることはできそうだ
- 高台への移転を考えることはできそうだ
- やむを得ず住んでいる人については高台への移転を考える機会を作ることはできそうだ
- 高齢者の意識を高めることはできそうだ
- 高齢者が自分のリスクを知る機会を作ることはできそうだ
- 耐震評価を進めて意識向上を図ることはできそうだ
- 寝ている部屋だけでも耐震化を図ることを考えていくことはできそうだ

＜公助＞

- 地区内事業者において検討している対策について調査してほしい
- 避難時の携行品を予め預けておくことが可能な高台の施設について検討してほしい
- 迅速な避難が難しい世帯や地域に対し生き延びるためのゴムボートの設置を検討してほしい
- 津波避難救助艇（ライフカプセル）等の補助について検討してほしい
- 津波災害特別計画区域（レッドゾーン）に相当する区域には避難艇を備えてほしい
- 行政がリーダーシップを取り、高台への移転を考える場を作ってほしい
- 高台への移転に対する補助金が必要だ
- 高齢者の意識を高めるために、住んでいる家の耐震評価をしてほしい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 地域防災力となる担い手を確保するために、ブルベリー等の地域の特産品を育てていくことが必要だ
- 地域防災力となる担い手を確保するために、付加価値の高い農業を皆で考えていくことが必要だ
- 津波災害リスクの低いエリアへの移住を促進するため、地域の空き家を利用して、移住を進めることが必要だ

- 地域防災力となる担い手を確保するために、農業で生計を立てる人を多くすることは必要だ
- 地域防災力となる担い手を確保するために、漁業のみでなく別の産業を進めることを考えることが必要だ

- 地域防災力となる担い手を確保するために、国道を利用する観光客向けの産業を振興することはできそうだ
- 上に挙げた施策を実施するためにはリーダーを育成することが必要だ。（現在はいない）
- 地域防災力となる担い手を確保するために、松崎の農家レストランのような地元の農産物を活用した店を作ることは必要だ
- 地域防災力となる担い手を確保するために、国道を利用する観光客向けの店を作ることが必要だ
- 地域を維持するために、20 年先を見て産業振興を考えることが必要だ
- 地域防災力となる担い手を確保するために、鹿肉を利用して、食害防止と産業振興の両立が必要だ

＜公助＞

- 地域防災力となる担い手を確保するために、地域の産業の振興を進めるためにビジネスモデルを皆で考えることは必要だ
- 移転等の施策を行うにあたっては、メリットに感じられるような助成制度等の手厚い支援策を検討することが必要だ

＜その他＞

- 地震・津波による災害リスクへの関心を高め、正しく理解してもらえるよう留意する必要がある
- 検討を進めるにあたり、高齢者が参加できる方法を検討したほうがよい
- まちおこしと防災をリンクさせて検討していくことが必要だ
- 地域づくりの課題の一つが防災であることを認識することが必要だ

逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)

●対策

＜自助・共助＞

- トリアージの考え方を取り入れながら、災害時の避難、救助の行動や対応を地域で決め、周知していくことはできそうだ
- 災害時に住民個々人の想定される避難行動について、地域住民みんなで共有する場を設けることはできそうだ
- 地震後は、まず自分自身の身を守ることを徹底するためのルール化を検討できそうだ
- 災害時の地区における避難ルールや役割分担を予め決めておくことはできそうだ
- 地区で避難や救助の取組みを行っている人の活動をさらに伸ばしていけるよう地域で支援していくことはできそうだ
- 高齢者が住んでいる建物のマップ作りはできそうだ

＜公助＞

- 避難ルート上に夜間避難用のソーラー誘導灯をとりつけてほしい
- 車での避難もできるよう、側溝に蓋をつけるなどの既存施設を活用した避難路の拡幅を検討してほしい
- 事業者等が保有する災害時に活用可能な資機材の所在の調査をしてほしい
- 山間部にトイレやキャンプ場等の災害時に避難場所として活用できる施設の整備について検討してほしい
- 地区内の避難場所の安全性を確保するため、必要な調査を実施してほしい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 若者がいないことを前提とした災害時要援護者対策が必要だ

＜その他＞

- 地区の災害に強い面、弱い面を把握し、地区の強みを活かした避難行動をとれるようにしたほうがよい
- 避難を支援したことで、被害が拡大しないよう留意する必要がある
- 地区毎に住民の避難に対する考え方に差があるため留意する必要がある

生き延びる（地域が早期復旧するための支援機能の向上）

●対策

＜公助＞

- 避難が長期化した場合の、避難者が集まって生活できる避難所等を検討してほしい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 避難施設については、地域住民が普段の利活用を考えてから、整備をしていくことが必要だ

その他

●対策

＜自助・共助＞

- 皆で声を掛け合って人を集めることはできそうだ

＜公助＞

- 会の広報を強化してほしい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 観光と防災のうまいバランスを考えることが必要だ

＜その他＞

- この会議にもっと多くの人を集めることが必要だ

●その他

- 地域の安全を確保するには若い人を増やすことが不可欠
- 防災上の課題がある地域であるという意識改革が必要

【小下田地区】

共生する（リスクを理解し、工夫を積み重ねて安全性を高めるエリアの形成）

●対策

＜自助・共助・公助＞

- 防災教育を継続させることにより、どの年代でも役割分担ができるコミュニティを形成することはできそうだ

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 防災教育を継続することにより、地域における防災意識が常にあるコミュニティを形成することが必要だ
- 若い頃から防災教育を行い、高齢者になっても防災意識を高く持つようにすることが必要だ

逃げる(住民、観光客、従業員などの安全を確保するための警戒避難体制の構築)

●対策

＜自助・共助・公助＞

- 高齢者等の弱者の避難を支援するためのルールを考えていくことはできそうだ
- 地区を細分化して、避難時の初動マニュアルを作成することはできそうだ

＜公助＞

- 地区内のすべての人が避難できるだけの避難場所を確保してほしい
- 地区内の避難場所の安全性を確保するため、避難所の耐震等の調査を実施してほしい

●対策実施において気になること、心配なこと

＜自助・共助＞

- 高齢者でも積極的に訓練に参加する雰囲気づくりを行うことが必要だ

＜その他＞

- 避難訓練の参加率を上げる工夫が必要だ

生き延びる（地域が早期復旧するための支援機能の向上）

●対策

＜公助＞

- 避難が長期化した場合にも対応できる避難設備等を検討してほしい
- 長期的な避難場所がホテルだけでは不足するので、すべての人が避難できるだけの避難場所を確保してほしい
- 救出・救助活動のための迂回路の整備を検討してほしい
- 地区には病院がないので、被災時に治療にあたってもらえる場所を確保してほしい

その他

●対策

＜自助・共助＞

- 地区ごとに、避難等を円滑に行うための地区防災計画をつくることはできそうだ

当日の様子【7/21 八木沢・小下田地区】

B		
C		
D		

6 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（市民集会#2）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者数
平成 28 年 10 月 6 日（木） 19:00 開始	伊豆市役所土肥支所 ４階集会室	15 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶	
みんなで考える会の共有 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりについてみんなで考える会（２回目、３回目ワークショップ） ●第３回伊豆市津波防災地域づくり推進協議会（伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画）	
伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画（素案）について ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画（素案） ●今後の進め方	
津波災害リスクと共存するための暮らし方と住まい方の考え方	

項　目	当日の様子
意見交換・質疑応答	
まとめ	
閉会	

（３）意見交換・質疑応答概要

◆参加者：津波災害特別警戒区域の指定は、社会福祉施設や学校や医療施設があった場合に対象となるということか。

→加藤先生：新たに建つ場合や改修の場合に対象になる。

→伊豆市：医療施設はベッドが有る場合に対象。ベッドが無い場合には対象外。

◆参加者：津波災害特別警戒区域指定より、どうやったら逃げられるかの方が重要なのではないか。

→加藤先生：全く同感である。ベースは、資料（推進計画素案概要版）の P18 に記載してある対策をきっちり実施すること。ただ、国のルールに基づくと区域指定をするのが良い。

◆参加者：今回の話（みんなで考える会）で良いと思うのは、きちんと具体的な形を作ったこと。これをどうやって継続的に進めていくかが今後の課題である。

→伊豆市：現在でも推進計画で不十分なところがある。観光客対策などが不足している。今後、協力しながら計画の見直をしていきたい。また、計画の運営についても評価の場を設けていきたい。

→加藤先生：基本は、みんなで考えるということ。自分でできることと行政に支援して欲しいこと。ここで議論したことを基に来年度からやっていく。旅館組合の人も前向きの意見を出している。

→原田先生：地域で具体的な計画を作って行政の支援を受けて、改善していくというプロセスが、この計画の工夫だと思っている。

◆参加者：このような官民共同で推進計画を練った地域は他にあるのか。地域の活性化に繋がった例はあるのか。
→静岡県：浜松、焼津、磐田でこのような推進計画を作っている。まだ、作られたばかりなので地域の活性化の検討にまでは至っていない。
→原田先生：官民一体となって、地域のことを具体的に考えながら計画を作った事例は、日本でもここが始めて。日本の先端を行っている。
→加藤先生：市民と一緒というのに加えて観光と防災を考えているということがここの特徴。この姿勢自体が新しくて、国交省も注目している。

◆加藤先生：津波災害（特別警戒区域指定については、これまでの協議で対策を強化する区域を設定することが良いという市民意見があり推進計画の対策として設定している。このまま区域指定の方向で検討を進めて良いのか、参加者の感触を確認したい。
→参加者：良い。
◆加藤先生：第 3 回協議会では観光や若い人の帰省にマイナスの影響があるのではないかという意見もあった。ただ、この名称は法律用語なので変えられない。そのために、「愛称」を作るのはどうかという提案がある。
→市民：必要ない。こういう時代なので、変にオブラートに包まず、ハッキリ言ったほうが良い。

◆加藤先生：県の方に津波災害（特別）警戒区域指定後にどのようなものが課せられるかを説明していただく。
→静岡県：津波災害警戒区域は、基本的には避難する先の整備やハザードマップを作ること。外から来る人に知らせるため、不動産取引の重要事項説明書に記載される。津波災害特別警戒区域は、災害時要援護者の方が助かるよう、上層階に逃げて助けられるようにするように建物を作るなどのルールを作る。

◆市民：この議論は、適用するかどうかをこの会議に参加している我々に聞いているということか。
→加藤先生：その通り。行政が決めるというより、皆さんが決める必要がある。

◆市民：愛称を使うとして括弧（法律用語）は、外せないのか。
→加藤先生：括弧は外せない。例えば、津波災害（特別）警戒区域という言葉を英語に直すと極端な意味に感じ取られる可能性がある。本来の、みんなでがんばるという意味に近い愛称を付けるほうが良いと思う。

◆市民：一般の住宅は対象か。それに対する対策は自前になるのか。
→静岡県：今の計画では、一般住宅は対象にならない。補助制度は今のところ無いが、国に対して要求することは可能。ただし、住宅の不動産取引においても重要事項説明書には記載される。
→加藤先生：住宅を対象とするかどうかは、法律としては可能。どういう規制をかけるかは市と地域の人たちが話しあって決めればよいという法律。そのときに、余計なお金がかかるという可能性があり、補助の話が出ている。一方で、気候風土に合った家を建てるという常識に対して補助が必要かという考え方もある。

◆伊豆市：他の市町村で地価に影響があった例はあるか。
→静岡県：東伊豆町と河津町で津波災害警戒区域の設定を行ったが、地価に影響があったかは分からない。この後、全国の地価を国交省が来年１月に発表するが、そのときに影響がわかるかもしれない。
→伊豆市：浸水区域であることはすでに分かっているので、津波災害（特別）警戒区域と改めて指定されたとしてもさほど地価に影響がないとも思える。

◆市民：例えば、沿岸部に防波堤を作ると区域範囲が変化するのか。
→静岡県：実際に防波堤を作ったとして、最大クラスの津波に耐えられるかという評価手段がいまのところない。なので、現時点では、防波堤を作ったとしても、見直しはされない。
→原田先生：対策次第で範囲は変わるので、一度決めたら範囲が変わらないというわけではない。

◆市民：山に土地はあるので家を作っても良いが、農振法でなかなか難しい。対策はあるか。
→加藤先生：今のところは、それは考えられていない。現場の問題を国に投げかけ、対応を考えてもらうことは充分に可能であると考える。国は現場の状況を把握しきれていない。現場でトップランナーとして計画を検討する伊豆市からの提案は説得力を持つ。

◆市民：土地の値段が下がったことで困っている人もいる。この場に参加している人だけじゃなくて、もっと沢山の人に意見を聞いたほうが良い。
→加藤先生：別途、オープンハウスで、住民の皆さんに説明する場を設けることにしている。

◆加藤先生：もう一回確認するが、通称・愛称は必要ないか。

→市民：津波災害（特別）警戒区域だけど意識を持って観光客を受け入れているよというアピールする方が重要。英語にするとゾッとするのなら、愛称も考えるべきなのでは。

→市民：話題づくりとして地域での呼び名はあってもよいのでは。

→加藤先生：では、話題づくりという意味で、通称・愛称を公募するというのはどうか。

→市民：話題づくりならば良いだろう。

（４）まとめ

- 警戒区域指定については、オープンハウスなどで、今日来られていない人にも周知し、丁寧に説明していく。
- 警戒区域の名称は、メインとして法律用語を使う。話題づくり、周知を深める意味で、市民の皆さんに通称・愛称を広く公募していく方向で検討する。

7　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりについてみんなで考える会（オープンハウス）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	来場者数	ニュース配付数
平成 28 年 11 月 14 日（月）～ 平成 28 年 11 月 20 日（日） 11:00～16：00	伊豆市土肥 スーパーあおき店舗前	126 名	144 名

（２）当日の様子

（３）概要

■取り組み方針：共生する

- 想定浸水深の周知が必要だ
- 浸水区域外に住んでいる人も津波の訓練に参加すべきだ
- 「特別警戒区域」の言葉のインパクトが心配だが、区域指定の考え方は賛成だ
- 要援護者のための特別警戒区域指定が必要だ
- 被災後のまちづくりについて計画を立てておく必要がある
- 地震時の空き家の倒壊が心配だ
- 津波よりも土砂災害が気になる

■取り組み方針：逃げる

- 避難路に係る橋の耐震化が必要だ
- 除草など普段から避難路までのルート確保が必要だ
- 避難階段の手摺り等の整備が必要だ
- 津波からの避難のために一家に一台救命艇が必要だ
- 個々に応じた詳細な避難計画が必要だ
- 個々に応じた避難計画が必要だ
- 避難路の誘導表示、看板の設置等により浸水区域の見える化が必要だ
- 車で避難する時のルール作りや無電柱化が必要だ
- 津波は逃げるしかないので防潮堤は反対、避難ができるようにしていくことが必要だ
- 福祉施設入居者の避難のについて考えることが必要だ

■取り組み方針：生き延びる

- 小中一貫校の土肥小学校は、２階以上が浸水深以上であることやＲＣ構造であるため、避難所として利用することや改修して仮設住宅として利用したらどうか。
- 小土肥には体育館などの避難生活する場所がないことが不安だ
- 避難生活場所が必要

■取り組み方針：守る・減らす

- 地震時には土砂災害についても対策を考えていくことが必要だ
- 防潮堤により眺望が悪くなるので必要ない
- 防潮堤により眺望が悪くなる
- いつ起こるかわからない津波対策で防潮堤は不要だ
- 逃げる時間を稼ぐための防潮堤整備が必要だ
- 逃げ切るための防潮堤の整備が必要だ
- 自然には敵わない。しかし、時間稼ぎのための防潮堤整備は必要だ

■その他

- 計画は将来がある若い人が考えるべきだ
- 土肥地区の住民でないため、勤務中の発生したときの状況について不安がある
- 市が主体で提案していかないと進まない

以上

8 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりについてみんなで考える会（大市民集会）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者数
平成 28 年 12 月 2 日（金） 19:00 開始	土肥小学校	39 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・市長挨拶	
これまでの検討経緯 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりについてみんなで考える会による講演会、ワークショップ、市民集会の実施状況 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画（素案）について ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画（素案） ●今後の進め方	
津波災害リスクと共存するための暮らし方と住まい方の考え方の説明	
意見交換・質疑応答	
まとめ	
閉会	

（３）意見交換・質疑応答概要

◆参加者：津波浸水区域の設定などは歴史的背景を踏まえているのか。

→原田先生：過去の津波は考慮されている。過去の災害を起こした津波を調べ、２つのレベルを設定している。その上でレベル１は、100 年±数 10 年を見て災害が起こらないように準備していくというもの。レベル２は東北の津波のように想定していないほど大きな津波がやってきても、何らかの形で命だけは助かるように準備しようというもの。しかし、あくまで想定であることを理解してほしい。

◆参加者：想定外についてもっと考える必要があるのではないか。津波の速度、浮力、津波の落下する力、火災、原発からの影響について知りたい。

→静岡県：浸水想定について水位しか表されていないが、津波災害警戒区域を指定した際に公表される基準水位には、各地での速度も考慮されている。原発については県全体で原発に対する避難体制や風向きにおける汚染の広がりについてリサーチしている。

◆参加者：観光地としての復興については計画に入らないのか。

→静岡県：国が作成した推進計画ガイドラインでは、推進計画に復興を盛り込んでいる浜松市の例を挙げている。復興についての考え方を推進計画に盛り込むことは可能と思われる。

→加藤先生：津波防災推進計画に含めることも考えられる。地域防災計画や市全体の計画に含めることも考えられる。被災してお手上げではなく、円滑に復興するための事前準備をしておくことは大切であるが、これをやっているところは僅かである。ちなみに世田谷区はやっている。

◆参加者：ワークショップでのポストイットに対する回答やコメントを出していくべきでは。

→伊豆市：今回検討している推進計画自体がワークショップで出されたみなさんの意見に基づきつくられている。アクションもポストイットの意見を盛り込んだもの。

◆参加者：シミュレーションを見ると川に上がっていく遡上波が映っていなかった。川を上がる遡上波が堤防を越えることを考慮すると浸水深は広がるのではないか。

→静岡県：シミュレーションは川の遡上も考慮している。シミュレーションは陸地がどれだけ浸かるかを表現しているため水源（川）の色を抜いている。

→参加者：例えば子供が川で遊んでいたときに危険を示すため、どれだけ遡上波が上がってくるかを示す必要があるのでは。

→静岡県：シミュレーションはあくまでも洪水時でなく通常時の川を想定しているので、条件によっても遡上波の高さは変わる。しかし、危険であることを地域の中で周知しておくことはできる。

→原田先生：津波が来ているときには川の近くは危ないという認識を持っておくことは必要。警戒区域では川の中は除くため注意喚起の場所から除かれる。そのため、川についても注意するポイントとして議論の対象に残しておく必要があるのではないか。

◆参加者：津波が来て家屋等が流され瓦礫が道路等に広がった場合、瓦礫処理はどこにどうするのか。また、道路寸断による孤立化についてはどうするのか。
→伊豆市：推進計画の中の「ハード・ソフト対策の体系」の「生き延びる」において、災害の危険性がなくなるまでの避難生活環境の確保や災害に強いネットワーク構築の施策が盛り込まれている。
→静岡県：県としての取り組みを紹介したい。事前復興計画を平成 27 年度に作っている。緊急輸送路をどのように確保するのか、瓦礫についてもどこにどのように処理するのか、建設会社をどのように確保し、速やかに現場に投入していくかの計画を立てている。市としても復興計画を作った例もあるが、県としてもバックアップしていく。

◆参加者：事前に土地の確保をどこにするのかを地域で決めておかないといけない。計画をしていると言っても、具体的に決めなくてはいけない。
→伊豆市：広域受援計画で瓦礫の一時置き場所など大体の場所を確認して計画を立てている。
→参加者：既に計画があるのか。
→参加者：地権者の同意等も必要。その辺りを埋めていかないと。
→伊豆市：形状や状況の変化もあるので、その都度、変更していく必要があるというのが現状。
→加藤先生：「する」と「できる」を整理したうえで検討していく必要がある。

◆参加者：津波の川への遡上について、八木沢は水門があるので少しは安心と感じる。しかし、土肥や屋形などは心配である。防災委員で防災マップを各戸配布している。津波が来たときの問題点、対策を全体で考えるべきではないか。
→伊豆市：八木沢での防災意識を推進計画に定めることで土肥全体に広めていくことを考えている。

◆参加者：市長が言われたように楽しく歴史を調べて、昔の津波が 1,000 年に１度という考えなら警戒区域は米崎や下村なども考えてほしい。

◆参加者：警戒区域内に建てる指定の建物に規制がかかるということだが、建築基準法も変えていくのか。
→静岡県：建築基準法は地震の揺れに対するもの。建築基準法は変わらないが、それに加えて津波への強さが求められる。

→静岡県：建築基準法上だと、災害危険区域の指定ができる。県の建築基準条例で災害危険区域を指定できる。それとは別に、津波地域まちづくり法の制約として建築基準法に制約をかけるということ。
→参加者：その区域内には木造建築は建てられないということか。
→静岡県：津波に対して強いかどうかが問題。
→参加者：しかし、先ほどの説明では２m以上の波が来れば木造は流れてしまうと言っている。基準法もそれに合わせて直さなければ、住宅を建てる人が出てきてしまうかもしれない。
→加藤先生：確実に安全な建物が蓄積するようにするべきだという意見。区域指定を赤色にすれば良い。市町村ごとの条例で縛ることができる。沖縄の例を見ると、法律などに縛られず台風に強い家づくりができている。法律だけが全てではないし、法律で規制をかける方法もある。
→参加者：宿泊施設は木造で建てても規制に関係ないのか。
→静岡県：関係ない。

◆参加者：ゾーン指定について賛成である。津波は自分には関係ないと思っている人に対して知らせることができる。

◆参加者：復興を考えたときの費用対効果。指定された人が家等を売却して高台に移転したいが風評被害等で目減りしているというとき、復興資金を事前に支給し、目減りした分を補てんするということはできないのか。指定された土地に対しては固定資産価値を下げられないのか。放射能については浜岡原発から直線距離で 60ｋｍ。考える必要があるのではないか。
→伊豆市：土砂災害についての減免はある。区域指定については例がない。浸水区域になっている時点でこれ以上地価は下がらない。また、津波災害警戒区域に指定したところでも今のところ下がっていない。
→加藤先生：風評被害に関してはマスコミが作り出している。報道の仕方が重要である。津波に関して頑張って取り組んでいる地域という報道のされ方が良い。国の制度としてこのような補助はない。プラスの何かをセットで提案してもらえるように提案していく。

◆参加者：風評被害という点で、悪い風に捉えられるのであれば、逆手にとって区域に愛称をつけることで観光の宣伝になるのであれば、良い方向に向かうのではないか。検討材料にしてほしい。
→伊豆市：前向きに検討する。

（４）まとめ

原田先生：具体的な課題や今後続けてやっていかなければならない点が挙がってきた。観光、環境の両面で配慮して暮らしていけるよう工夫をしてほしい。

加藤先生：知らない幸せより、知っている幸せが一番。津波対応に百点満点の答えは出せない状態、これから取り組みを積み上げて百点に近づけていくことが大事である。

以上

９ 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（市民集会#4）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者数
平成 29 年 5 月 30 日（火） 19:00 開始	伊豆市役所土肥支所　４階集会室	44 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶	
これまでの検討経緯 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会による講演会、ワークショップ、市民集会の実施状況	
伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画の説明 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画	
講演 ●「観光防災まちづくり～これまでとこれから～」 東京大学生産技術研究所　加藤孝明准教授	

項　目	当日の様子
今年度の取り組みについて ●地域主体による具体的な取り組み推進 ●土肥地域の観光防災まちづくりの取り組みを正しく知って・理解していただくための取り組み ●６／４情報伝達・確認訓練、土肥中学校での（仮称）観光防災まちづくり授業	
意見交換・質疑応答	
まとめ	
閉会	

（３）意見交換・質疑応答概要

◆参加者：津波災害特別警戒区域の愛称を出す前にもっとメリットや問題店など内容を理解する必要がある。事務局の方を地区集会に呼んで詳しい説明を受ける会を行った方が愛称の案が出るのではないか。

→事務局：積極的に伺って説明をしたいと思う。本日お願した 13 地区に行けるよう努める。またお声をかけていただきたい。

◆参加者：さきほどの加藤先生のお話の中で「知ってる幸せ」の話があったが、知っているだけではなく知った後に、それをどう活かすかが重要である。全壊と半壊のエリアはおおまかなくくりであるとの事だが、避難タワーへの避難経路の確保ができるかが一番不安である。土肥地区は非常に古い家も多く道路幅も狭い。行政が行っている支援など現状を踏まえ、どこに避難路をつくると現在ある施設を活かせるか等考えていかねばならない。

→事務局：ご意見としていただく。

→加藤会長：おっしゃるとおりである。シミュレーションのみだと、浸水する事や壊れる事などが分かるだけである。その後どうなるかを正確に知るためには、今ある情報だけでは不十分である。対応する評価を各地域に提供し、それをベースにして自分たちの住んでいるこの地区で何をするべきかを考えていく環境をつくる必要がある。

◆参加者：まだ知ってることが半端だと感じる。

→加藤会長：現状では中途半端であり、もっと正確に知ることが重要である。それについては研究室でデータ集めながら進めている。例えば、建物か倒壊してどの道が通りにくくなるか等を含め、もう少し分かりやすく詳しく評価をしていこうと進めている。今後、提供できると思う。

◆加藤会長：愛称を決める結果が重要なのではない。周知が不足しており、地域の人が全員理解していない状況で指定をする事は良しとしない。一方で今回の推進計画は何回も集会を開いて積み重ねてつくりあげたものである。私もいくつか他の自治体で行政計画策定の手伝いをしているが、伊豆市の今回のやり方は大変丁寧に周知されていると思う。しかし、それでも参加者が限られており、特に高齢の方は参加できていないなど、周知が徹底されていないという指摘もあった。その通りだと思う。今回の愛称募集は、募集という過程を通して、知ってる幸せの最初の部分を周知していくことも兼ねている。愛称を考える時には全ての人が区域指定について考えると思う。その部分に焦点を当てている。

◆加藤会長：宣言は努力目標ではなく必ずつくる。そのため手順を参考にしながら、この地域をどうしていくのかという宣言に最後にまとめていただきたい。それを入口と

して今後各地域で努力、工夫が積み重ねられていく。その最初のスタートをきるという意味で 9 月 15 日の締切が設けられている。作り方についての不明点など質問をいただきたい。

◆参加者：行政が縦割りだという話だが、今回愛称募集等で横の繋がりの必要がある場合に対応してくれるのか教えてほしい。例えば、農振法については農林水産課等と話をしてくれるのかどうか。防災だけではなく市全体の中で、みんなの作った計画が活きるようにしてもらいたい。

→事務局：産業部農林水産課も協議会の委員である。関係する部署には、入ってきた意見を投げかけ、市役所も横の繋がりでバックアップしていく。地域の市民の方がこれだけ頑張られている中、行政が防災だけを頑張っても成り立たない。市として頑張っていく。

→加藤会長：既成概念からずらして考えた方が新しい発明ができる。ちなみに、さきほど紹介した 100 人の集落は町役場や県庁の方がおっしゃっていましたが、あそこは日本の法律が適用されていない、と。つまり、既存のいろいろな縦割りの壁があり、効率良く物事を活かすためには縦割りの壁がある方が実は効率が良い。しかし、地域ベースに落とし込んだ場合に、それが足かせになる場合が中にはある。伊豆モデルをつくっていくためには、ぜひ市役所にもチャレンジしていただきたい。

◆参加者：全国へ伊豆市が名を馳せるのは非常に素晴らしい事である。ただ、事業をしている身として、宣言をして全国に知られる事のどこにメリットがあるのか疑問に思う。みなさんが恐れているのはマイナスの面が多いと思う。地域の旅館のみなさんを見ていると、大志を持ち、新聞やラジオに出て全国へ発信することを上手く活用し商売に大きなプラスに繋げていると思う。しかし、地域のみなさんからは、あえてなぜ発信するのか疑問に思う意見がでると思う。日本で初めての指定なので、こんなに素晴らしい事はないとみなさんに説明できたら良いと思う。

→事務局：まだ特別警戒区域の指定をすると決まったわけではないが、愛称を募集することにより、さきほど加藤先生がお話されたように、みなさんに理解していただくことを合わせてやっていく。

→加藤会長：どうして一番でなければいけないのか、という話はどうしてもつきまとう。これを指定した結果、ものすごいプラスメリットがあるかというと、今の段階では特別大きなメリットは実はない。地域内には、知ってる状況がつくれるというメリットがあるが、それを超えるメリットはまだない。ただ確信ですが、一番になるということは注目されるという事である。逆に言うと、ひとつもないことを国は気にしている状況である。法律をつくったのにどこも手を上げない。これはゆゆしき問題です。ここで一番乗りするような議論が積み重ねられているところに対して、きっと応援してくれるに違いないという勝手な確信をもっている。それを頭に入れつつ、立ち止まっているより、前に進んだ方がいいというのが私の考えである。

◆参加者:「(仮称)津波対策がんばる"地域宣言"」ですが、「私たち八木沢松原地区は・・・」と記入するが、八木沢地区でも津波がほとんど関係ない地区がある。他にも、土肥地区の新田も津波はあまり関係ないと思う。これは津波に限定しているのでしょうか。
→加藤会長：近隣に津波に関係するような地区はあるのではないか。
→参加者：大久保地区はほとんど関係ない。少し離れている。単純に「津波対策」と書いてあるので気になった。
→加藤会長：津波プラス地震対策で考えていただければと思う。まずは自分たちのことを守るという点では地震対策で良いが、津波が来ないから津波対策は不要というわけではないと思う。美波町でいいますと、山付近の集落は津波対策として、津波で被災した人たちを自分たちの集落で受け入れる準備をしておく、という対策を進めている。そのように直接津波の被害がなくても、津波対策はありえると思う。そういう観点からも両にらみで地震対策と津波対策を検討していただければと思う。
→事務局：地震を入れた方がいいか検討させていただく。

◆参加者：さきほどの指定に関して、各地区の事情等もあると思うが、総合的に進めるのか、あるいは地区ごとに要望をとりまとめていただけるのか教えていただきたい。
→加藤会長：それはまだ議論しておらず、決まっていない。個人的な意見としては、指定する時は全部一斉に指定する事になる。後は、小土肥と土肥と八木沢、それぞれまとめて指定するという考え方もありえなくはない。土肥地区の中の一部だけを指定して他は指定しない、という事はありえないと考えている。

◆参加者：指定による国からの補助等の問題で、全域同じような考えで進むと支障がでると思う。指定するかしないかによっても、国からの補助が出る出ないによって大変違ってくる。八木沢地区に対しても防災対策はいろいろある。それは国からの補助等がないと不可能ではないかとも思うので、各地区で要望ができるのかできないのかについても早くお願いしたい。八木沢地区や小土肥地区の意見の集約ができ、要望を反映させるのかどうなのか。
→加藤会長：たとえば、八木沢地区は意見がまとまり指定してほしいとなった、土肥地区は指定したくない、といった状況の時に、八木沢だけ先行して指定することは可能かということでしょうか。それは議論が必要となる。
→参加者：連合区としても、いろいろな計画がある。重要な案件を抱えているため、それに対して反映できるのか。
→加藤会長：議論をして、八木沢を先行して指定することはありえる。ただし、先に指定したからといって国から多く補助金が出るということはない。

◆参加者：愛称案として一つ。以前、福島で津波が起こった時に周りの事を考えずにそれぞれが自分で行動しろとテレビ等で見た。土肥の場合、「がらい」という方言があ

る。八木沢、小土肥の方は使うか分からないが、意味としては「ひょっとしたら」、「まちがった」、という内容の方言である。愛称は短くインパクトがあり、みんなが知らないでなんだろうと疑問に思う言葉が良いのではないかと思う。「がらい宣言のまち」というのはいかがか。

→事務局：ぜひ応募していただきたい。

（4）まとめ

◆原田副会長：今年度は愛称をみんなで考えてほしいという事と、地区の宣言を考えてほしいという事を提案した。それらをやっていく事は、地域の方も大変だなと感じるかもしれません。地域の情熱や愛着が非常に必要になってきます。今回議論の中で区域指定の話もありました。これは指定をすること自体が目的ではなくて、そういったことを通じてみなさんが地域のことをより正確に知っていただく。そして参加した中で地域のことに愛着をもって、今後も地域のために取り組んでいこうという体制をつくるためにやっているんだと理解していただくと一番良いのではないか。土肥の人口減少が将来的にかなり進行していく。こういう状況を考え、地域を今後継続するために、みなさんが協力して盛り立てていく必要がある。その中で本日の防災の話や、みなさんが連携して意見を出し合う場をできるだけたくさん開くと良いのではないか。本年からは、みなさんでいろいろ参加して考えて、協力していくという取り組みを始めさせていただきたい。

→参加者：地域の住民の方に情熱がない場合、どうやって奮い立たせるか。

→原田副会長：初めからみんな情熱があるとは限らない。とにかく何か参加する機会をたくさんつくるところから始めましょう。

◆参加者：何か得策等があればと思う。先生方は簡単におっしゃるが、とりまとめる側としては本当に難しく大変です。

→加藤会長：本当にそこは難しいと思う。経験から言うと、お願いしているうちはダメである。自発性、内発性と内側から湧いてでるものなので、そういう状況をつくりだすためにはこちらは刺激するしかない。それがツボに当たるかどうか。そこは職人芸的で非常に難しい。その地域の特性や人の特性にもよる。また、本日は見事に女性が一人もいない状態である。男性だけだと議論ばかりしていて前に進まない。

→参加者：女性参加は必要である。

◆加藤会長：最後に、本日は一通り議論を行い、一歩前に進む準備ができたと思う。9月15日が締切なので、それを楽しみにしています。その間、必要な手伝いを行うので、ぜひみなさんも楽しめる会を開ければと思う。

以上

１０ 伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりを土肥中生と考える会

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者	実施形式
平成 29 年 9 月 5 日(火) 14：20～15：10	びわっ子ホール	全校生徒 59 名 教員 10 名	講義
平成 29 年 9 月 6 日(水) 8：30～9：20	びわっ子ホール	３年生 19 名 教員５名	ワークショップ

（２）当日の様子

講義

ワークショップ

（３）土肥中　地震・津波対策がんばる“地域宣言”

A班

わたしたち 土肥中3年生 A班 は、

『 一人でも多くの人を助ける 』

~~とする~~ことを宣言します。

そのため地域では、

○助けが必要な家の確認をする。

○避難所をだれでも使えるようにする。

○安全な道を確認し、分かるようにする。

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成29年9月

B班

わたしたち 土肥中3年生 B班 は、

『 1人1人の防災意識を高める 』

~~とする~~ことを宣言します。

そのため地域では、

○防災セットの確認・管理

○避難場所・経路を把握

○被害の大きさを知っておく(防災講座)

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成29年9月

C班

わたしたち 土肥中3年 C班 は、

『 土砂災害や津波もふくめた
避難の確認を 』

~~とする~~ことを宣言します。

そのため地域では、

○避難ルートの場所・時間の確認

○家具の点検・固定

○非常時に使う物のチェック・準備

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成29年9月

D班

わたしたち 土肥中 3年 D班 は、

『 家族と生き延びる 』

~~とする~~ことを宣言します。

そのため地域では、

○ 夜間避難訓練をする

○ 寝室にくつをおく

○ 非常食を多分に準備する

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成29年9月

以上

１１　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（市民集会#5）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者
平成 29 年 11 月 2 日（木） 19 時開始	びわっ子ホール	49 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶（伊豆市）	
これまでの検討経緯 ●各地区における観光防災まちづくりに係る取り組み実施状況 地震・津波対策がんばる“地域宣言”の発表 ●地震・津波対策がんばる“地域宣言”を発表に関する説明 ●各地区・団体より地震・津波対策がんばる“地域宣言”を発表 ●各地区・団体の宣言に対する感想を相互に発表	
さらに取り組んでいきたいこと ●推進計画改訂 ●津波防災避難訓練の新たな試み ●レジリエンスアワードへの応募	

項　目	当日の様子
意見交換・質疑応答	
まとめ	
閉会	

（３）地震・津波対策がんばる“地域宣言”

土肥中３年生Ａ班	土肥中３年生Ｂ班
わたしたち 土肥中3年生 A班 は、 『 一人でも多くの人を助ける 』 ~~とする~~ことを宣言します。 そのため地域では、 ○助けが必要な家の確認をする。 ○避難所をだれでも使えるようにする。 ○安全な道を確認し、分かるようにする。 といった取り組みを、できる範囲で、 地域のみんなでがんばっていきます。 ※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、 できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。 ※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。 平成29年9月	わたしたち 土肥中3年生 B班 は、 『1人1人の防災意識を高める』 ~~とする~~ことを宣言します。 そのため地域では、 ○防災セットの確認・管理 ○避難場所・経路を把握 ○被害の大きさを知っておく(防災講座) といった取り組みを、できる範囲で、 地域のみんなでがんばっていきます。 ※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、 できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。 ※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。 平成29年9月

土肥中３年生Ｃ班

わたしたち 土肥中3年C班 は、

土砂災害や津波もふくめた

『 避難の確認を 』

することを宣言します。

そのため地域では、

○ 避難ルートの場所・時間の確認

○ 家具の点検・固定

○ 非常時に使う物のチェック・準備

といった取り組みを、できる範囲で、

地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

土肥中３年生Ｄ班

わたしたち 土肥中 3年 D班 は、

『 家族と生き延びる 』

~~する~~ことを宣言します。

そのため地域では、

○ 夜間避難訓練をする

○ 寝室にくつをおく

○ 非常食を予分に準備する

といった取り組みを、できる範囲で、

地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

土肥・小土肥地域づくり協議会

わたしたち 土肥・小土肥地域づくり協議会 は、

『安全、安心な環境づくりをがんばる地域』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 避難する為の環境整備

○ 被災後の支援対策

○

といった取り組みを、できる範囲で、

地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

西豆地区地域づくり協議会

わたしたち 西豆地区 地域づくり 協議会 は、

『 防災を考えた 生活環境と住む人の命を守る
安心と生き甲斐の地域 』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 災害時に命を守る安全な場の整備と 安全行動をとること.

○ ともに助け合う. 地域内の人と人のつながりを積極形成すること

○ 災害リスクに対応しながら. 地域景観を保全していくこと

といった取り組みを、できる範囲で、

地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

伊豆市観光協会土肥支部

わたしたち 伊豆市観光協会土肥支部 は、

『 観光客が安心してすごせる観光地づくり 』

光を することを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 観光客への避難路及び避難地の周知

○ 観光関係者の防災知識の向上（研修）

○ 観光客を含んだ、会合等の備蓄

といった取り組みを、できる範囲で、
地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 10 月

土肥温泉旅館協同組合

わたしたち 土肥温泉旅館協同組合 は、

『 宿泊者に地震・津波リスクへの啓発活動の強化 』

をすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 伊豆市と連携し、啓発文章をお客様へ配布致します。

○ 静岡県ホテル旅館生活衛生同業組合と連携し、情報収集に努めます。

○ 当組合危機管理委員会を定期開催し、組合員に情報提供します。

といった取り組みを、できる範囲で、
地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

伊豆漁協土肥支所

わたしたち 伊豆漁協土肥支所 は、

『 避難を重点に置く 』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ お客様の避難誘導を行う（避難経路の確認）

○ マニュアルの作成をおこなう

○

といった取り組みを、できる範囲で、
地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 ___ 年 ___ 月

大藪区

わたしたち 大藪区 は、

『避難路の安全確認、及び
高台備蓄を推進』

することを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○避難路の安全確認調査の実施

○避難経路確認訓練などの新たな訓練の実施

○各家庭の持出品や区資機材・備蓄品の高台備蓄の推進

といった取り組みを、できる範囲で、
地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

中浜区

わたしたち 中浜自主防災会は、

『我が家の備えをがんばる地域』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○家具の固定

○非常持ち出し袋の整備充実

○建物の耐震化

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域が頑張るための努力目標を示したものであり、
できなかったといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合がありあます。

平成 29 年 10 月

平野区

わたしたち 平野防災会 は、

『地震津波が来た場合
なにをおいてもまず逃る』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ ヘルメット ライフジャケットを身近に

○ 到底ごとに逃る方法を

○ まず火の元 電気のブレーカを切る

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 年 月

金山区

わたしたち 金山区 は、

『地理的なリスクを十分に理解し、
近隣住民が力を合わせ安全にすばやく避難』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 安全避難経路の確保

○ 避難時の高齢者への声かけ及び支援。

○

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

馬場区

わたしたち 馬場区民 は、

『災害時に助け合う地域』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○災害時、隣人とのコミュニケーション(声かけ)を図り避難を確認する。

○定期的に災害(地震、津波、台風)について話し合う。

○支援が必要な人の情報を共有する。

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

浜区

わたしたち 小土肥 浜区民 は、

『 自分の命を守り、仲間の命を守る 』

~~とする~~ことを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 各家庭で「我が家の防災計画」をつくります。
○ 「我が家の防災計画」共有します。
○ 防災として重要なことを提起し、その実現のため当局に積極的に働きかけます。

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

黒根区

わたしたち 小土肥 黒根区 は、

『 にげる・生きのびる・たすけあう 』

~~とする~~を宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 避難路の整備・改善
○ 避難地でのたすけあい、プライバシーの確保
○ 食量・水・衣類のびちく

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

八木沢連合区

わたしたち 八木沢区民 は、

『 自助、共助の精心を尊び
良り多くの方がまきこれます事を念願致します。 』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○ 日常より近隣の方々を気使います。
○ 災害弱者の方の支援も出来る限り希望致します。
○ 行政と共に訓練に励みます。

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 29 年 9 月

松原区

わたしたち 松原区 は、

『 ぶじ全員避難！ 』

とすることを宣言します。

そのため地域では、

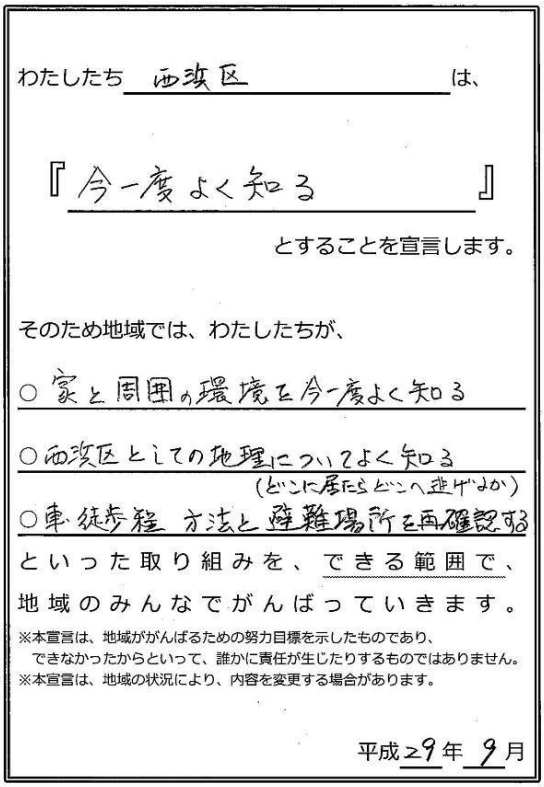
○ 同居家族状況の把握
○ 日頃からコミュニテーの醸成！
○ 避難訓練をくり返す！

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標をしめしたものであり、できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成 年 月

西浜区



わたしたち 西浜区 は、

『今一度よく知る』

とすることを宣言します。

そのため地域では、わたしたちが、

○家と周囲の環境を今一度よく知る

○西浜区としての地理についてよく知る
（どこに居たらどこへ逃げるか）

○車、徒歩程、方法と避難場所を再確認する

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

※本宣言は、地域ががんばるための努力目標を示したものであり、
できなかったからといって、誰かに責任が生じたりするものではありません。
※本宣言は、地域の状況により、内容を変更する場合があります。

平成29年9月

（４）意見交換・質疑応答概要

◆参加者：各区で積極的に防災に関して話し合いをされていると思うが、この場に消防団の方と、警察の方がいない。情報共有をする上で、参加をしてもらうことはとても大事なことではないか。

→事務局：現在、秋季訓練の最中であり、11 月 5 日に大会で秋季の演習が予定されている。その直前ということで、時期的に問題があったかと考えている。今後はこれを踏まえたい。

→加藤先生：消防団は来る気がないわけではなくて、参加したいが時期が悪く来られなかったということ。以前の市民集会の時には参加していたと思う。大事なことなので、ぜひ次回は参加いただきたい。

◆加藤先生：大きく三つある。一つ目は、地域宣言を具体化するために何が必要か、何をするべきかについて議論していただきたい。二つ目は、目標は津波災害への備えということをプラスのイメージで対外へ発信していくことである。詳しく言うと、津波防災先進地域としてイメージを確立させていく為に何をみなさんでやっていかねばならないのか議論する必要がある。三つ目は、更に前向きなエンジンを作り上げていく。この三つについて、議論いただきたい。

◆参加者:どこに避難するかということを、地震が起きた時にわかっていないのだから、津波に襲われる地区に関しては、道路上の交差点毎に避難方向の矢印を書く。災害が起きた時に、自分の家にいるとは限らない。

→参加者：地域づくり協議会において避難看板を要望し、各区で設置している。
何年か前からこういう話があった。以前はマイナス意見しか出なかったが、少し前向きになってきたので、やっとスタートラインに辿りつけた。その中で、備蓄や避難看板を付ける場所の話をした。何をしなければいけないかは話し合いしかないと思っている。やっていくことは、話し合いの中で決めていけばいいと思う。

◆参加者:以前の会議で、愛称を全国的に募集して注目を集めようという話があったが、それはどうなったか。

→事務局：全国から 100 件以上の応募があった。土肥地域と市内で３分の１程度。それ以外は全国からの応募。市の HP や募集サイトで募ったところ、各県１通以上応募がある状況。そういった意味では良い情報発信はできていると感じる。

◆参加者：メンバーを見ていると当初からいる方と、参加しだして間もない方がいる。非常に理解の差があると思うが、理由を聞けば納得できると思う。
各地区でそれぞれの問題に本気で取り組み、みんなで共有することを継続する必要がある。

→事務局：各地区や、個人によって理解度に差があるが、それを埋めていくことで避難訓練等の普段の取り組みもより深くなっていくというご指摘だと思う。

◆参加者：第３回協議会のときに、協議会のメンバーが東日本災害の風評被害についてのイメージが強かったので、負のイメージが多いと感じたが、徐々に理解が向上してきて今に至っていると思う。その状況を継続していくためには各区の方が伝達をしなければいけないと思う。口頭や文書、その他いろいろな方法で伝達をして、みなさんが同じレベルになるようにしていかねばならない。

→事務局：どのように継続して伝えていけば良いかという仕組みを考えねばならない。

◆参加者：情報の共有化ということで、回覧板に入れられるような防災の冊子を作成・配布し、都度防災発信の状況を区民で共有してはどうか。

→参加者：各区の町会等は全員が必ず参加するという区はあまりないと思う。その中で情報共有をするためには、先ほど意見があった回覧板が良いかと思う。

→参加者：広報を通して、防災に関する資料は各家庭に配布されている。回覧で周ってきたものを読んでもモチベーションはあがらない。会合でも年配の方々が多く若い人が参加していない点もモチベーションがあがらない。若い方が多ければ変わってくる。若い方がリーダーになることによって地域を盛り上げてほしい。回覧板を回したくらいでは防災意識が高まるとは思えない。

→参加者：回覧板の内容等も工夫が必要かと思う。地域に根ざした冊子づくりを提案したい。特集として目を引く親近感を呼ぶような冊子づくりをやっていったら良いのではないかと思う。

◆加藤先生：津波災害警戒区域と、津波災害特別警戒区域について、前回の推進計画の中では指定を前向きに検討するとなっていたが、次に改定する時には、どうするかということを決めたほうが良いと思っている。前向きな愛称を付けて全国一番に指定したらどうかという議論を以前の協議会でも行ってきており、今年度さらにより一歩前に進めたい。それについて、地域の人たちがどのように考えているか聞きたい。

→参加者：地元に住んでいる方は、過去の安政地震を目安に考えており、この辺りまでは津波が来るということは、誰もが共有している認識だと思う。そこからプラスのイメージに持っていくことを考えないと、分かっていることを、わざわざ名前を付ける必要があるのか、という意見もある。

みなさん、津波がくるだろうということは知っているので、少し視点を変えないとずっとこのまま平行線が続くと思う。

◆事務局：観光客など、知らない人たちに津波がどこまで来るのか、どこまで逃げればいいのかについて知らせる努めがある、という件に関して、大藪区と浜区と黒根区で意見交換会を行ったようだが、話し合いのときの様子など教えていただきたい。

→参加者：高台の方の平らなところがあれば防災倉庫へ備蓄とかを推進するような話をした。

→参加者：のぼり旗のおかげで、話し合いの場を持てるような状態までレベルアップした。今まで消極的だった人が、理解してくれた。うまく説明ができなかったことが、専門家が来て話し合いをすることで、進むことができた。そういう話し合いをした後に、黒根区として安否確認表を作った。各家族構成の情報や常備薬等、個人情報の為、書ける範囲で書いてもらった。それを区長が持っており、代々引き継いでいくこととした。防災の意識として黒根区では先日の意見交換会を設けたことで、レベルが上がったと思う。

◆　加藤先生：少なくとも否定的なご意見がいかほどの地域の中であるのかは知っておきたい。

→参加者：私はここの人間ではなく市外から通っている。分からない人のためにどうするのか。分かっている人と分からない人は非常に差がある。その点では津波が来ることは全国的に静岡県や南海トラフ全体では認識されていることを、どう受けとめるか、対応をしているという姿勢を、地元はするべきだと思う。

◆加藤先生：津波で被災する地域は非常に地域特性が多様なので、一番にして、国の支援を受ける。二番目に指定するよりは一番目に指定するほうが可能性は高くなる。こ

の地域にあった支援策が期待できるのではないかと私は感じている。あまり意見が出ないが、強く否定的な意見はなかったと解釈して良いか。

→参加者：積極的に指定に関する否定をするほどではないが、地区に指定をすることを決めたとたんに、事業を承認したと思われて、市が思いもよらないものを作成したり、逆に何かをしていく上で、増やしてもらいたいものがある時に市民の意見を聞かず、都合で実行されてしまうと、市民としてはとても不安に感じる。

→事務局：こういった話し合いはずっと続くと考えている。推進計画作成にあたってもいろいろな意見をいただいており、市が強制的にやらせているわけではない。みなさんの意見取りまとめを作り、進めて、同意をいただくということを繰り返し、継続していくという趣旨で、この会を行っている。

→参加者：目指しているものは何かということになる。目標は何か。私が知っている限りでは目標は日本一安全な防災のまちを作るということだと思っている。それに向かって邁進したほうがいいと思う。

→参加者：役員は単年の方が多い。そうすると、その年はその意見を知っているが、離れるとノータッチになる方が多い。そういう方を含めた意識を高めるためにも、指定を受けるということがあれば、指定を受ける中で、またみんなで意見を出し合い、良いまちをつくろうという方向へ進んでいくためにも今回の指定を受けてみるのが良いのではないか。

◆事務局：指定について非常に前向きな意見をいただいた。これを次回の協議会に報告させていただき、協議会で検討していく流れになると思う。

（５）まとめ

原田先生：このような取り組みをこれからも続けていくことで、土肥はその方向を良い地域、安全で、良い意味で日本のトップランナー、そして日本全国から土肥が注目される。ぜひ今後も継続していただきたい。

以上

１２　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（大市民集会＃6）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者
平成 30 年 1 月 16 日（火） 19 時開始	伊豆市役所土肥支所　４階集会室	41 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶（伊豆市）	
これまでの「みんなで考える会」の共有 ●「伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画」（第二版）について	
「津波災害特別警戒区域、津波災害警戒区域」について	
意見交換・質疑応答	

項　目	当日の様子
まとめ	
今後の観光防災まちづくりの取組について （伊豆市長　菊地豊）	
閉会	

（３）意見交換・質疑応答概要

◆参加者：区域指定を推し進める事で、防災に強いという事をアピールする事が観光にとって、プラスの材料になることは理解している。しかし、間違った方向に報道機関が報道を行うと、甚大な風評被害に繋がる可能性も含んでいると考える。区域指定を全国初である事を強くアピールすればするほど、風評が間違った方向へ向かう影響があるのではないかと懸念する。

→加藤会長：そのリスクは０ではない。警戒区域、特別警戒区域を指定する事、イコール極めて表層的な理解をすると、危ない区域、しかも特別警戒区域は特に危ない区域と単純な理解をする方が結構多いと思う。

マスコミの方もきちんと理解いただいて、本日、ほぼ全てのマスコミの方が揃っているので、恐らく明日以降、新聞へ掲載や、テレビで放送されると思います。こういう意見があるので、表層的な理解ではなく、区域の意味を理解した上で、誤解なく全国民に伝わるように報道していただきたいと思います。

恐らく全国初なので、全国に発信する情報になると思う。最初のボタンの掛け違いがあると、今心配された通りの状態になる可能性がある。そこは間違いなくきちんと報道していただきたい。

→静岡県：こちらの津波災害警戒区域等については、確かに名前だけでは非常に分かりにくいと思う。県の取り組みとして、この A4 のチラシがある。さきほど説明した重

要事項説明時の誤解をなくそうという点から、重要事項を説明する際には、このチラシを使って説明をしてほしいとお願いしている。その他の取り組みとしては、県のHP 等に情報を掲載する場合は、現状よりも分かりやすくするよう努めていく。

→加藤会長：風評的被害対策としては、2 月に決まる予定の愛称が一つの対策でもある。法律上、警戒区域と特別警戒区域は定めてあるので、それに代わる、誤解なく伝わる愛称を作ろうと位置付けている。

◆参加者：土地の評価額に対してどのような影響が出てくるかが気になる。個人的に金融機関に聞いて調べたところ、区域指定をしたからといって、地価に直接的な影響はないと聞いた。しかし、あくまでこれは近隣の売買事例の価格が元になり決まるとの事であった。さきほどのお話のように、特別がない状況の中でも、不動産は区域指定を明言しなければいけない義務があると言われた。これは当然良い事だと思うが、現状、我々事業者だけではなく、一般の方がマイホームを買う、または家を新設や増設する際に、近隣の売買事例が下がってしまうと、間接的な原因ではあるかもしれないが、土地の下落に繋がるのではないかと感じる。この辺りをリスクととらえ、限りなくリスクを 0%に近づけるにはどうしたら良いかを慎重に考えていかなければならない。

→加藤会長：土地の事は、重要事項説明の中で説明される。ただ、金融機関にヒアリングされた結果はさきほど話されたように、影響しないという事である。確かに、地価は下がっている。土肥の地価状況は分かりませんが、他の都市の津波被害が想定されている区域は以前と比べれば地価は下がっている。他の地域と比べても浸水するとこは地価の下がりが大きい。ただ、それは区域指定されたから下がっている訳ではなく、津波によって浸水する可能性があるという事で下がっていると理解している。

→事務局：土肥地区に支店を置く金融機関、そして不動産鑑定士に質問したところ、さきほどの静岡県では平成 25 年 11 月、第 4 次地震被害想定津波浸水として公表されている。企業または個人が借入する場合、津波浸水想定により金融機関が算出する土地、担保評価が下がる、また貸付上限額が下がる、また金利が上がるか等の質問を行った。東日本の 3.11 以降、評価は下降しているので、今回区域指定する事によって更に下がる事はないのではないかという見解であった。

これに関しては上がる要素、また、なお下がる要素があるのかについては、売買事例が出てくる。上がる要素としては、対策等を行って、土肥の浸水エリアだが、どうしても欲しいという方が増えるよう、魅力があるまちづくりをする事によって、土地取引がどんどん進むようなものを作っていく事が、今後の土肥地域のためになってくる。それによって下落の評価が止まるかと思う。区域指定によってこれより下がる事は現時点では考えられないとの回答であった。

→加藤会長：適切な言い方ではないかもしれないが、静岡市の駿河湾の町の方や首都圏から土肥を見れば、土肥の地価は下がりきるだけ下がっているので、これ以上下がる事はないかと思う。むしろここからプラスを如何に付加していくのかを考えた方が良

い。その一つが災害への備えであり、充実させればさせるほど、地域の価値が上がり、結果地価が上がる。そういう好循環のサイクルを作っていく事が今一番必要とされている。

◆参加者：指定をされた場合、指定の対象となる施設の改修等を行わざるを得ないという事があるが、結局施設にしてみれば、指定を受けたから直さなければいけない。その部分をなんとか対応できないかという話が出てくると思う。
→加藤会長：新築は仕方ないとして、区域指定された後に、既存不適格で改築が必要になるような建物が今現在あるか。
→参加者：該当地域にある。
→加藤会長：そこの改築の時に、余分にお金がかかることをなんとかしてもらえないかという話ですね。今のところないですか。
→事務局：今のところない。
→加藤会長：これまでの集会での議論の中でも、今の話も含めて、指定されるリスクとデメリットがあるけれども、メリットがないという議論はたくさん出てきた。それは、基本同感である。個人的な見解ではあるが、制度として若干不完全でちゃんと背中を押してくれるような支援策が乏しいというのが、津波防災地域づくり法である。これまで議論してきた通り、現在指定されているところはない。ない中で、新しい支援策を国と県が考えようがない。今回初めて区域指定に土肥が一歩進めるという事であれば、それに合わせてきっと何か新しい支援策を考えてくれるに違いないという期待感を持っている。今回をスタート地点にして、一緒になって考えていくという気がしている。

◆加藤会長：これまでの議論の中で、なぜ一番でなければならないのか、という意見もあった。一番に指定する事のメリットは、今後、国や県と一緒になって作っていく事になる支援策の対象になりえるからである。土肥地域に合った支援策が期待できるのではないかという点で 2 番より 1 番が良いのではないかという議論がこれまでされてきた。確約できる立場ではないので、必ずそういう事ができるとは言い切れないが、そういう方向感がありえる。

◆参加者：現時点で、指定を受けてどうなるかについて、皆さんまだ意識が薄い。指定されるだけではなく、いろいろな条件が付いてくる事や、他にも何かがあるという事を、皆さんによく説明していただいて、みんながよく理解した上で、それならやってほしい、という地元の意見がこれから出てくると思う。まだ連携していないので、ぜひその辺について、丁寧に進める中で、よく教えていただきながら考えていきたいと思う。
→加藤会長：指定を止めて欲しいという事でしょうか。
→参加者：そうではない。

→加藤会長：今回をスタート地点にして、一緒になって地域がより安全になるような方策を、地域と関係者（市、県、国）と議論を勉強しながら進めていこうという話ですね。

◆参加者：万が一、風評被害が起きた後の緊急的な支援策について知りたい。当然起こらないように行政と一体となってしてほしいが、もし起きた時の対策を協議していただきたい。

→加藤会長：マスコミの方もそれを心して、丁寧かつ正しい情報発信をお願いしたい。ただ、万が一もありえなくはない。その時に向けての保険的対策の心構えを考えていかねばならないと感じる。

◆参加者：この会に参加している方はある程度理解していると思うが、土肥の人たちはどの程度進んでいるのか、どんな感じなのかがあまりよく分かっていないと思う。例えばハザードマップなども誰にでもいつでも見ることができる感じにすると分かりやすくて良いのではないか。後は、中学生の意見にあった CM をたくさん流す事も良いと思う。もう少し広い場所で様々な年代の方が参加できる会を開いていただきたい。

→加藤会長：まずは、きちんとする事からスタートする。一連の会議で大勢の方が参加されているが、土肥の人口からするとまだまだ一握りである。そういう意味ではまだまだ徹底させる必要がある。本日は 41 人参加されている。本日帰られて、参加者一人当たり 10 人の方に説明いただけると 400 人知った事になる。そういう形も含めて、より大勢の人がきちんと知り、正しく知った上で、前向きな対策をみんなで積み上げて、推進計画の第 3 版、第 4 版に繋げていけたらと思う。

（４）まとめ

◆原田副会長：本日の皆さんの意見を聞いていて、少し考えないといけない事があると思った。それは、今こうして議論をして意見を出してもらっている事は、何のためかというと、将来の土肥をどうするか、未来を考えてどうするかという事である。

皆さんがここで議論や提案した事、これからやろうとする事が、将来の土肥を作っていく事になる。将来は決まっていない。皆さんが決めて、皆さんが行動を起こし、皆さんが進むかどうするかを決めていくから未来が決まっていく。確定された未来はないので、皆さんが意識を持って決めて進んでいく事が、土肥の将来がどうなるのかを決めていく事になる。

中学生の会についても、若い中学生に考えてもらい、これから生きていく土肥を中学生が決めていく、非常に良い機会だったと思う。そういった中で津波からこの地域をどう守るのか、そして観光で暮らしているこの地域でどのようにしていくのか、これは皆さんが将来を決めて進む、その作りゆく過程がこの場だと考えてもらえればよいと思う。

いろいろな意見があると思う。それぞれの意見で将来が決まっていく。それを決める

のは皆さん自身であり、どういった未来にするのかも皆さんにかかっているという事を理解していただきたい。

（５）今後の観光防災まちづくりの取組について

◆菊地伊豆市長：あらためまして大変お疲れ様でした。そしてこれまで 2 年近くみなさんでの勉強会や議論を続けていただきまして本当にありがとうございます。

まず、市長として何をやりたいのか、何を考えているかをお話します。

例えば、米崎港は大変素敵な漁港です。そこには集会所があり、集会所まで行くと十分に高いので、そこにまずは避難する施設をしっかり作りたい。そして、道路が一本しかないため、あの細い道路を整備するか、あるいは恋人岬に細い急坂の道路があるので、どちらを確保しようかと考えている。

小土肥であれば、戸田方向へ行く坂道から小土肥を見ると、赤い屋根の景観が良く、本当に良い海辺である。黒根方向の人たちはしっかり避難経路を作り、皆さんの大切な赤い屋根が見下ろせる場所で、バーベキューや子どもたちが遠足をする事ができる。避難施設と合わせた自分たちの海辺の町を見渡せる場所を作りたい。

八木沢の西浜は、昔は国道まで海であった関係から、安全な場所は丸山の国道より上、海も富士山も見える素晴らしくきれいなところがある。あそこにいきなり高台移転してくださいと言っても無理なので、観光施設と合わせて、できれば新しい旅館やホテルなどをやりながら、何十年もかけて進めたい。もし移転される人がいるのであれば、移転対象地として一番適切であると考えている。

土肥の中心部であれば、土肥高校まで行けば安全である。土肥高校のような一番安全なところに土肥の文教地区を作って、将来医師に来ていただいた際は、あの辺りまで下がって作っていただく。今の介護施設も建て替える時にはあそこまで下がっていただく。土肥高校くらいまで行けば 5mの防潮堤はいらない。あそこまで行けば 50 ㎝か 1mで済む。

現在、土肥の皆さんは松原公園でグランドゴルフなどをされているが、土肥高校の近くの安全な場所にグランドゴルフ場やゲートボール場など作らせていただければ、完全に安全が確保される。それらをする時に、今のゾーン指定と関係があるかといったら、それが一つの大きな条件になっていく。

安全な景色の良い丸山の農地については、農地転用は今までは至難の業でありましたが、我々はゾーン指定をした。土肥の皆さんが決心したので、大切な農地を畑としても大事に使いながら、安全のために農地転用させてください。県の皆さん、国の皆さんにそのように伝えたい。

高台移転は簡単にはできない。何千万円もかかる家を明日変えるという事は無理である。長い時間がかかってもいい、お互いにそういった覚悟の上で、ある施設を作る時には少し下がるか、頑丈なものをつくりましょう。

伊豆市の中で、ホテルの廃業が続いている地域もあるが、土肥はオーナー変更で旅館を続けている事が多い事が利点である。そのため、新たなホテルや旅館、観光施設を

作っていただく可能性がある。その時にはしっかりしたものを作っていただく。そのためにもゾーン指定は一つの前提条件になりえる。市長としてはそういったことを考えている。ぜひ皆さんと一緒に土肥のまちづくりをさせていただければと思っている。
そこで、何のためにやるかについては、長期的には伊豆半島全体として世界レベルの観光地を目指している。一週間や一ヵ月でも滞在できるような。中間目的としては、二年半後のオリンピック・パラリンピック。短期としては、来年の今頃には、土肥の国道 136 号線の開業がある。来年の土肥桜祭りの時には道路が整備されている可能性がある。将来何をするか、これから一年後までに何をするか。そして今から 3 月までに何をするか、を具体的にやらせていただきます。
いくつかいただいている中から、一つだけ代表的なことを言わせていただくと、土肥の海岸にある松原公園を目的地にしたいと考えている。今、土肥に来る皆さんは、海の見える旅館に泊まりたい、温泉旅館に泊まりたいと、旅館を目的地にしている。
土肥金山を見る人は土肥金山を目的地にしている。恋人岬は目的地にしているかは難しいところですが、そこに寄ろうという意思がある。ただ、花時計はまだ目的地にはなっていません。
花時計の横の駐車場は一年間通して、夏しか有用できていない。一年を通して松原公園を目的地にしたいと思ってもらう。そうしていくための事業をみなさんとやらせていただきたい。
いろいろな指摘がありましたゾーン指定は、伊豆市として土肥の地域住民の皆さんの命と観光のお客様の命を全力で守らせていただきます、という決意表明をしたい。土肥温泉の皆さんには地元の住民、従業員と合わせて、私たちは全国に先駆けて全力でお客様の命を守ります、ですからおいでくださいという決意表明をさせていただきたい。
防災計画がないので、なかなか修学旅行に来てくれないという話を伺った。私たちは全国に先駆けて、お客様の命を守る決意表明をしました。これから確実に安全なまちにする。修学旅行に来る学生さんに安心して土肥においでくださいという体制を皆さんと作らせていただきたい。
すでにお話があったように津波の高さが公表されています。私たちは地域住民、観光客の命を預かっている身として、その危険を見ないふりをするのではなく、承知し安全対策を取ります。そして、市民の命、お客様の命を守らせていただきます。
その決意表明をさせていただきたいと思う。
本日、41 人お集まりですが、これが総会ではないことは承知しています。すでに 2 年近く、先生方にも努力いただいて、ゾーン指定を含めて、私たちは観光防災まちづくりをしようとして総合的にいただいておりますので、本日特段の異論がなければ、伊豆市長として知事に申請を出させていただきたいと思っています。
ゾーン指定を県知事にお願いするのではなくて、みなさんと一緒に市民の命、お客様の命を全力で守るように、みなさん一緒に進ませてください。よろしくお願いいたします。　以上

１３　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（市民集会）

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者
平成 30 年 6 月 25 日（月） 19 時開始	伊豆市役所土肥支所　４階集会室	50 名

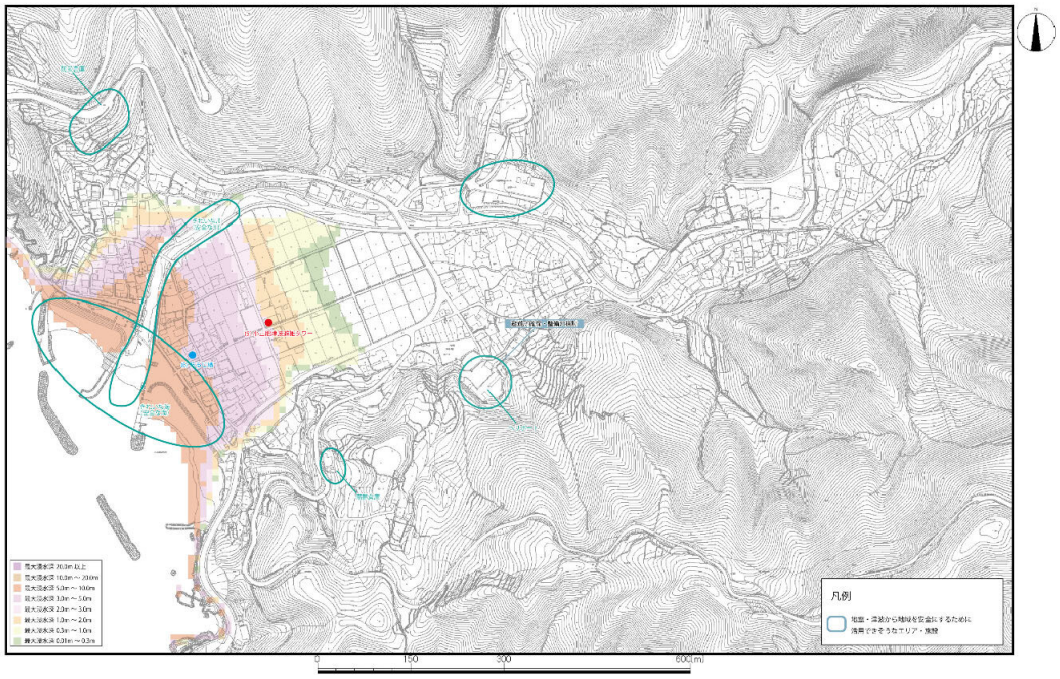
（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶（伊豆市）	
観光防災まちづくりの取組 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくり推進計画 ●伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会による講演会、ワークショップ、市民集会の実施状況 地域の取組も進めるために ●地域主体による具体的な取り組み推進に向けて ●今年度の取り組みについて	
「観光防災まちづくり～これまでとこれから～」 東京大学生産技術研究所　加藤孝明准教授	

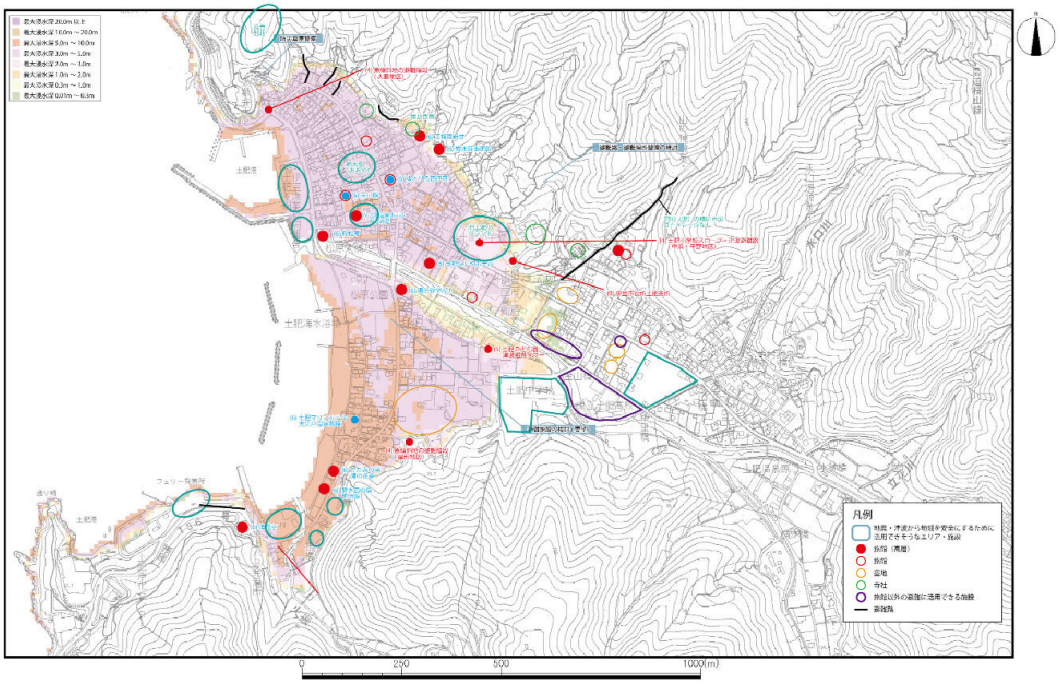
項　目	当日の様子
意見交換・質疑応答 テーマ：「地震・津波から地域を安全にするために活用できそうなエリア・施設」	
まとめ	
閉会	

（３）地震・津波から地域を安全にするために活用できそうなエリア・施設
（意見交換　成果）

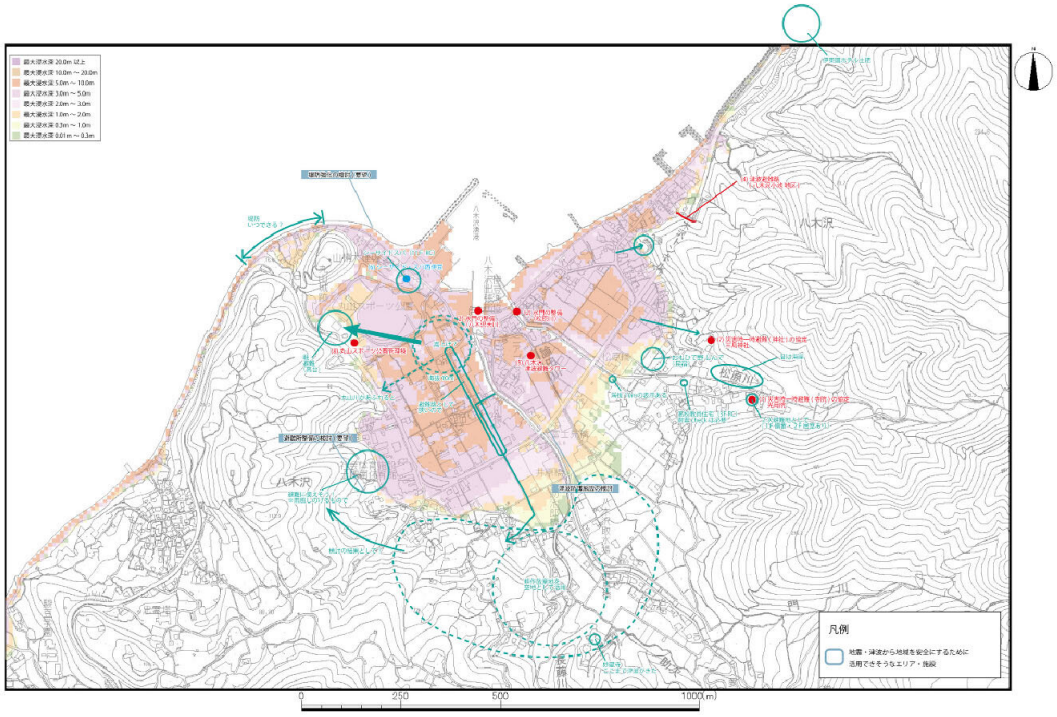
◆小土肥地区



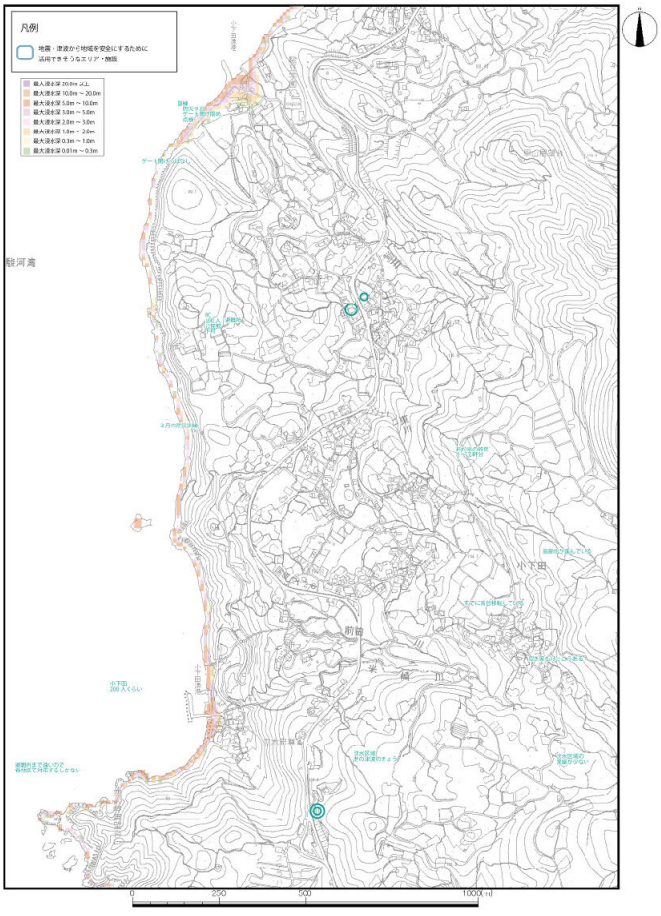
◆土肥地区



◆八木沢地区


凡例
地震・津波から地域を安全にするために
活用できそうなエリア・施設
八木沢
松原川
0
250
500
1000(m)

◆小下田地区


凡例
地震・津波から地域を安全にするために
活用できそうなエリア・施設
駿河湾
小下田
0
250
500
1000(m)

（４）意見交換・質疑応答概要

テーマ：「地震・津波から地域を安全にするために活用できそうなエリア・施設」

◆大藪 中浜 平野地区

地区毎に旅館等の避難場所はあるが、それ以外にも高台の別荘地も探せばあるのではないか。

大藪、中浜、平野地区のメインの避難場所は、旧土肥小学校グラウンドと校舎になる。

◆馬場区 金山区

津波が来た時、５～１０分以内に避難するならば、近くの旅館や広場に逃げるのが良いのではないかということで、ある程度名前を入れている。

松原公園周辺は高い建物がないため、避難タワーを設置した方が良いのではないか。

大藪地区や馬場地区にある、高台へ逃げる道の整備をしなければ、逃げるのが困難ではないか。

山川の上流から河口にかけて土砂がたまっているため、大雨時の土砂災害が津波よりも心配。

◆八木沢地区

7 地区で防災委員が出ている。避難場所は各地区決まっており、防災倉庫の設置も進んでいてほとんど終わっている。

一番困るのは、一時避難場所はつくっているが、二次避難場所は丸山公園の管理棟になっているが、海抜 10m弱であるため、新たに南小学校を避難場所にするよう市に要望している。

松原地区にある高校教員住宅の耐震はどうなのかわからないが、3 階建て鉄筋コンクリートなので一時避難場所に使えないか。

光月院の 1 階倉庫は鉄筋コンクリートで、 2 階の居住部分には、20～30 人避難できると思われる。

西浜区の海抜ゼロメートル地区の避難が難しい。道路が狭いため、側溝にふたをして車が通れるようにしてはどうかという意見も出た。

◆小土肥地区

小土肥は、海に近い地区と山に近い地区とに分かれている。

海に近い浜区と黒根区では、高台に避難場所が決まっており、そこまで逃げた後の二次避難場所として農村広場を考えているが、そこに緊急用のヘリコプターが着陸できるのかという不安がある。津波発生の際、津波の威力を増してしまい地域に被害が及ぶような河川の土砂の撤去、砂が上がってきた場合どうしたら良いかという話が出た。

他にも二次避難場所として土肥ホームの駐車場が設定されている。

生き延びるマニュアルは各区作成しているが、生き延びた後、次のプランを考えていかなければならないと思った。

◆小下田地区

以前の WS でもそうだったが、こういったところに参加する方が少ないと同時に、普段の防災も厳しいところがあるのが現状。

津波の浸水区域内の住宅・家屋は、昔津波を受けたことにより、既に道路を高くしたり、高い所に家を建てており、浸水区域からはずれている。

地震については、耐震に問題があるのは理解しているので、各地区の各自が津波や地震の対策をしていくしかない。

◆質疑応答

参加者：これから計画される津波対策の中に防潮堤という案も出るかと思うが、防潮堤をつくることによりどのようなリスクがあるか。

原田准教授：防潮堤をつくることによるリスクについては、議論の中に入れていく必要がある。防潮堤を整備するということは、現在の状態から変化させることになるため、変えること自体がリスクになるということになるかもしれない。防潮堤整備による効果にも限界があることを認識する必要がある。土肥地域にとってどのような対策がよいのか、その中のオプションの１つである。対策を選ぶいうことは、土肥地域をどのようにしていくかということと、一緒に考える必要がある。

加藤准教授：私たちはこれらの自然の中で暮らしているという自覚をしっかりともつことが重要であると改めて確認できた。防災を考えるということは、自然と人間の関係を見直すことになると思われる。東日本大震災以降、防災至上主義に陥っている感もある。今一度、自然の中での私たちの暮らしを見直し、未来に向けて防災も含め総合的に地域の在り方を考えていく。その上、今何をすべきかを議論ができるとよい。

（５）まとめ

◆原田准教授：地域の実情を非常に的確に捉えており、計画もしっかり作られていると感じた。

地区防災計画は、皆さんが決めている事をうまく入れ込むだけで作成できるものと思う。今日話し合ったことを整理してまとめる作業をしていくことになると思う。

これがあったらいいな、この場所に使えそうな物があるなということを整理する上で、少し先の将来、皆さんの地域で安全に暮らしていけるかを継続して議論していただきたい。

◆加藤准教授：現状で地域にはそれなりに資源があり、使い方もこれから考えれば出てくるかもしれないが、お金はかかるし、他人のものであることが問題となってくるかもしれない。

「住民先行　行政後追」といっているが、行政に要望しているだけでは、行政はお金がないため進まない。例えば、ブロック塀を撤去して道路を広げるとなると時間もお金もかかるが、住民が全ての所有者との話をつけてきた上で支援を要請すれば、行政

も協力してくれるかもしれない。そういう段階まで、地域での議論を詰めていければ、状況が前に動くものと期待している。
地区防災計画は、いつでも、だれでも、どこでも作ることができるものであり、がんばる地域宣言を考えた単位であればどの団体でも作ることができる。11 月５日「津波防災の日」に間に合うよう作成できるとよい。
今年度も前向きに進めていけるとよい。

以上

１４　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（意見交換会）in 小土肥

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者
平成 30 年 9 月 20 日（木） 19 時開始	伊豆市役所土肥支所　４階集会室	10 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶（伊豆市）	
地区防災計画を考える ●地域主体による具体的な取り組み推進に向けて	
地域づくりを考えるための資源を探す ●地域づくりのための資源とは	

項　目	当日の様子
まとめ	
閉会	

（３）意見交換・質疑応答概要

地区防災計画を考える

◆浜区

計画面

浜　地区　地区防災計画（地震・津波）

平成 30 年 10 月作成

浜　地区　地震・津波対策がんばる地域宣言

『自らの命を守り、仲間の命を守る』

そのため地域では、

・我が家の防災計画をつくる

・我が家の防災計画を共有

・実現のために当局に積極的に働きかける

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

いざという日のために備えておく普段の取り組み

視点	単位	取り組み	目標	備考
共生する	家庭	☑ 地震・津波による被害状況への理解	全住民理解（76 人）	
	家庭	☑ 避難時間の計測	全住民計測（76 人）	
	家庭	☑ 海のまち安全確保エリア、海のまち安全創出エリアの理解	全住民理解（76 人）	
	地域	☑ 避難訓練の企画・実施	年 2 回	9月、2月
		□		
逃げる	家庭	☑ ブロック塀の耐震化	全世帯実施（5 世帯）	市補助活用可
	家庭	□ 建物の耐震化	全世帯実施（10 世帯）	市補助活用可
	家庭	☑ 家具の固定	全世帯実施（33 世帯）	市補助活用可
	家庭	☑ 津波避難のための装備の準備	全世帯実施（33 世帯）	
	地域	☑ 避難路・避難場所の点検・管理	年 2 回	
	地域	☑ 避難所や防災倉庫の点検・管理	年 2 回	
		□		

いざという日に備える地域の取り組みルール

◎避難行動の考え方（反射的に動けるようになることが理想！）

大きなゆれがきたら…

自力で避難できる人　⇒　避難する

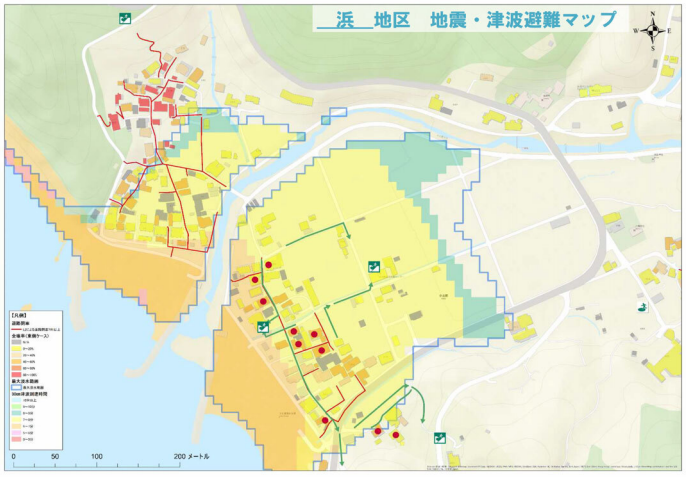
避難に支援が必要な人　⇒　外に出る

⇒

◎地区の避難先や備蓄をしている施設

施設名	資機材名	数量	単位	備考
避難場所（タワー）				
避難所（　　）				
備蓄倉庫（　　）	テント　食料　水　その他			

地図面



避難後に必要となる行動

浜　地区　避難後に必要となる行動

避難直後の状況	避難後の行動	備考
高台避難	・いない人の情報を集める。（学校にいる、旅行に行っている、職場にいる　等） ・人員確認。情報収集。 ・避難所に集まった人の様子を見て、飲み物の配布、簡単な怪我の治療、体調の把握をする。	
地区の人の集合	・様子を見て峰下（中央農道）に集合する。 ・地区民の人員の確認、体調の確認をする。	
市・支所との連絡	・（できたら市・支所と連絡をとる）	
いる人達で必要な班づくり	・食事班・テント設営班・情報収集班・介護班・保健班・捜索班など。	
捜索開始	・（2次災害が起きない状態になったら）ネット・ラジオ等で情報を収集する。 ・行方不明と思われる人の捜索に入る。（メンバーを選ぶ、危険、精神的苦痛　等）	
小土肥の避難場の設置	・安全を確保し、農村公園に行き、小土肥の避難所を設置する。 ・黒根、入谷とも連絡をとる。	
体調のよくない人に	・安全な家があったら、体調のよくない人の引き受けを依頼する。	
タイミング・条件		

【発表】

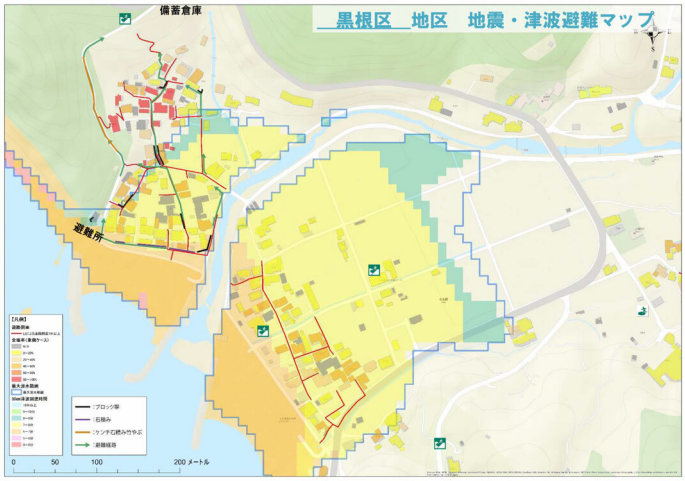
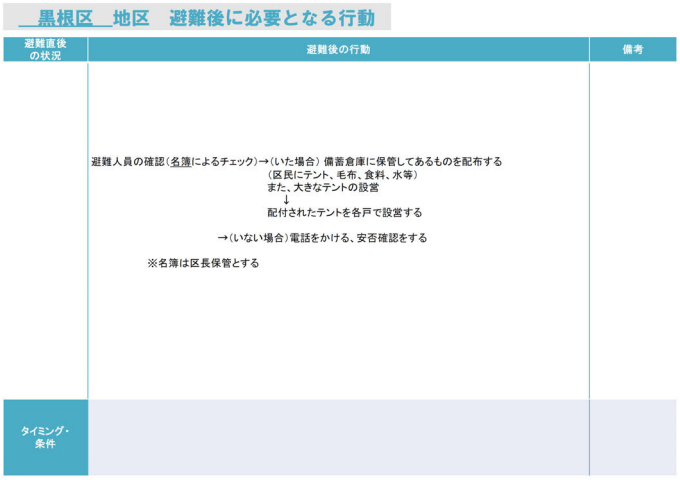
✓「自分の命を守り、仲間の命を守る」ということで、これが計画の主体である。防災計画をつくり、それを共有してあとは実現のために当局に積極的に働きかける。いざという日のために備えは充実しており、計画訓練は年間２回行っている状況で、夜間訓練も踏まえている。個々の世帯の防災用品はかなり充実している。

✓このように、自助力は上がってはいるが、地図に落とし込んだ時にかなり歩行困難な方が多いということがわかった。歩行困難者がどこに逃げるのだろうかということについて確認をしたが、ブロック塀の関係や、指定避難場所となっているホテルが実際使えるかということを、区では正確に確認はできていない状況にあることがわかった。

✓今のところ浜区としては３か所、避難タワー、林道、海岸のすぐわきを登っていった場所（林道につながっている）に逃げるような形になる。

✓避難した後について、現在区長に指揮命令系統が集中しており、区長や副区長、主となっている人たちがいない時にどう対処するのかということが課題としてあがっている。

◆黒根区

計画面	
地図面	
避難後に必要となる行動	

【発表】

✓「逃げる、生き延びる、助け合う」ということで、逃げる場合、自力で逃げられる人はただ逃げるだけでなく逃げながら声を掛けながら「津波が来るぞ」と騒ぎながら逃げようということ。避難に支援が必要な人については、昨年名簿を作成したので、どういう人がいるかというのを把握しておく。それに対して近所のいる人たちに対応してもらう。

✓津波の高さは海抜何mという数値で表されているが、津波の高さはこれぐらいというふうに電信柱などにあちこち津波の高さを表示する色をマーキングする、小土肥だけでなく、土肥、八木沢も高さを表示することによって、目につく。いざとなったらその高さより高い所に逃げれば安心だよという目安になる。観光客が来た時に、「この色は何ですか？」と聴かれたら「津波が来た時に、この高さまで逃げれば大丈夫ですよ」と目安になるということをこれからやっていければいいかなという話が出ている。これは土肥地区全体でやったほうがいいという話なった。

✓避難路上には、ブロック塀や石積み、急こう配の斜面の竹やぶがあったりして、崩れてくる恐れがある。避難路のリスクがある場所をマップで示すことで、リスクのある避難路を通って避難地の方向に避難せず、高いところへ移動する判断ができる。高さの目安になるものが町全体にあると、みんなが目にし、気にするようになる。このような取り組みをしていけばよいと思う。

◆加藤准教授コメント

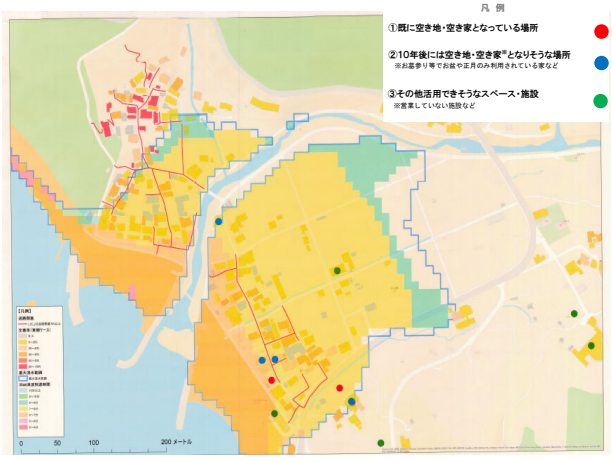
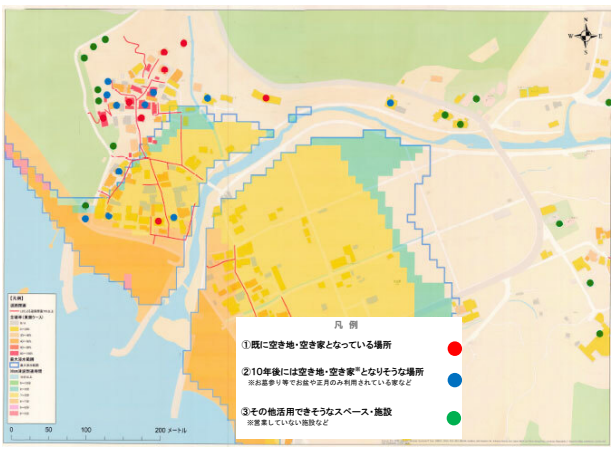
100 点満点の計画を作るのはかなり難しい。ポイントは２つあって、１つ目は今すぐできることを計画として書き込んでおくことで、直近でやれそうなことがあったがそれは是非今回の計画書の中に書き込んでいただければと思う。２つ目は今後取り組むべき課題をしっかりと今の議論を踏まえて書き出し、それを地域全体で共有していくということが重要かと思う。課題が分かれば、１つの計画ができた後に次から次へとバージョンアップしていくことにつながっていくので、是非課題を地域で共有するということを進めていただければと思う。

◆原田准教授コメント

今日の取り組みで、かなり具体的な地域の中の話を行い、どのように考えて避難の準備をするのか、計画として作っていくのかということを考えていただいたと思う。新しいアイディアも出てきたりしており、これから取り組むべきことをどういう視点で考えたらいいのかということも踏まえ、地区防災計画として仕上げていってもらいたい。そういうものを作った上でまた地域のみなさんで一緒にやっていきながらバージョンアップという形を進めるというのを繰り返していったら良いと思う。

地域づくりを考えるための資源

◆加藤准教授コメント：空き家、空き地を地域でどう活用していくかが課題となっている。空き家、空き地は地域の資源となりうるし、まちの形を変えていくときの種になる。空き家、空き地の調査が今すぐ防災のために役立つかは現時点ではわからないが、未来を考える基礎情報として重要なものだとだと捉えている。空き家、空き地をうまく活用し、地域の活力の高めている例もある。

ワーキング成果（浜区）	ワーキング成果（黒根区）
	

（４）まとめ

◆原田准教授：今日もいろいろ地域の状況の詳しいところがどんどんわかってきて、それを図の情報を出したことで、地域のみなさんが漠然と思ってたようなことが、かなり絵の中に落とし込めるところがあったのであろうと思う。そういったものを計画の中に入れていきながら、地域の課題である避難のことであったり、被災後の対応というものも考えていける情報ができたんだろうと思う。こういったものをうまく使う使い方を今後また進めていけたら良いと思う。

以上

１５　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりをみんなで考える会（意見交換会）in 八木沢

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者
平成 30 年 10 月 12 日（金） 19 時開始	伊豆市シニアプラザ	20 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶（伊豆市）	
地区防災計画を考える ●地域主体による具体的な取り組み推進に向けて	
地域づくりを考えるための資源を探す ●地域づくりのための資源とは	

項　目	当日の様子
まとめ	
閉会	

（３）意見交換・質疑応答概要

地区防災計画を考える

計画面

八木沢地区　地区防災計画（地震・津波）

平成30年12月作成

八木沢連合区　地震・津波対策がんばる地域宣言

『自助、共助の精神を尊び、より多くの方が生きられます事を念願致します』

そのため地域では、

・日常より近隣の方々を気使います
・災害弱者の方の支援も出来る限り希望致します
・行政と共に訓練に励みます

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

松原区　地震・津波対策がんばる地域宣言

『ぶじ全員避難！』

そのため地域では、

・同居家族状況の把握
・日頃からコミュニティーの醸成！
・避難訓練をくり返す！

といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

西浜区　地震・津波対策がんばる地域宣言

『今一度よく知る』

そのため地域では、

・家と周囲の環境を今一度よく知る
・西浜区としての地理についてよく知る（どこに居たらどこに逃げるか）
・車、徒歩などの方法と避難場所を再確認する

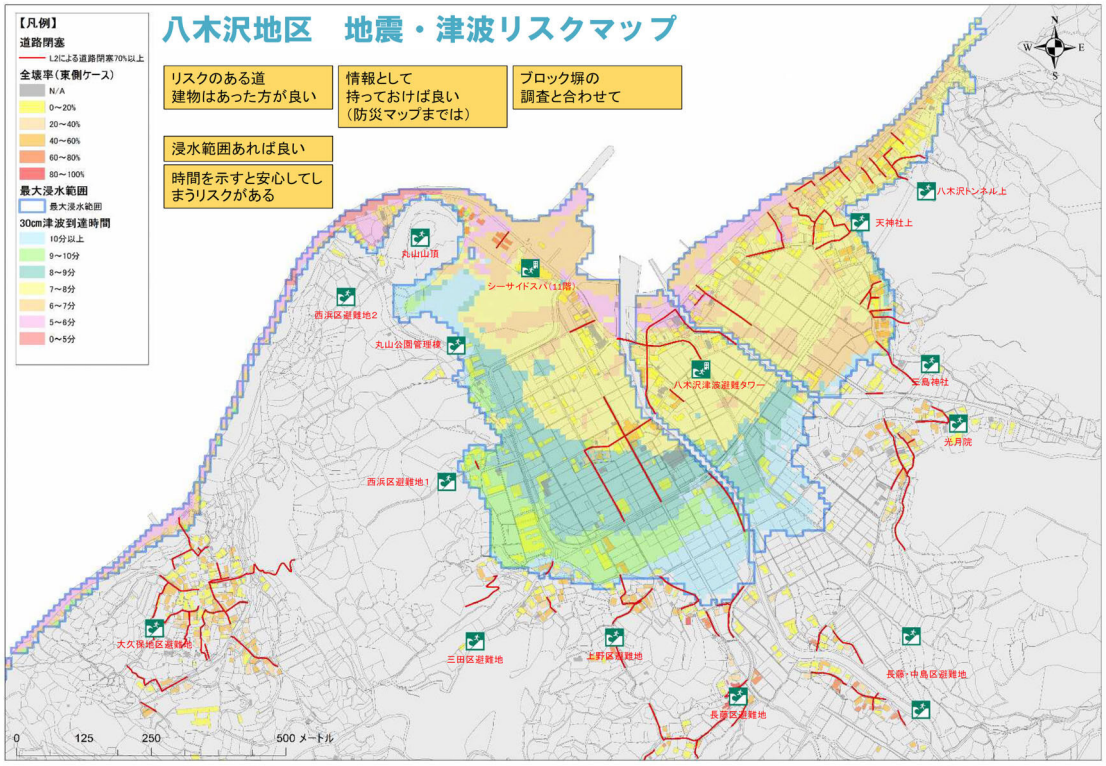
といった取り組みを、できる範囲で、地域のみんなでがんばっていきます。

自主防災マニュアル等作成状況（現在ある地域のルール）

・　西浜　区自主防災マニュアル（平成30年　月作成中）
・　　区自主防災マニュアル（平成　年　月作成）
・　　区自主防災マニュアル（平成　年　月作成）
・　　区自主防災マニュアル（平成　年　月作成）
・　　区自主防災マニュアル（平成　年　月作成）
・八木沢地区地震津波避難マニュアル（八木沢地区・津波避難防災マップ）（平成27年3月作成）

視点	単位	取り組み（■：自主防災マニュアル記載）	目標	備考
共生する	家庭	□ 地震・津波による被害状況への理解	全住民理解（250世帯）	
	家庭	□ 避難時間の計測	全住民計測（250世帯）	
	家庭	□ 海のまち安全確保エリア、海のまち安全創出エリアの理解	全住民理解（250世帯）	
	自主防	■ 講習会・防災訓練の企画・実施	年4回	
逃げる	家庭	■ 火災予防・消火器の常備	全世帯実施（250世帯）	
	家庭	■ 懐中電灯の準備・設置	全世帯実施（250世帯）	停電時点検
	家庭	■ ラジオの常備	全世帯実施（250世帯）	電池点検 予備電池
	家庭	■ 家庭用救急用品の備え	全世帯実施（250世帯）	
	家庭	■ 家族3日分の食料の備蓄	全世帯実施（250世帯）	
	家庭	■ その他寝具・衣類・日用品などの備え	全世帯実施（250世帯）	
	家庭	■ 避難路・避難場所の管理	全世帯実施（250世帯）	避難路点検変更
	家庭	■ 非常持ち出し品の準備	全世帯実施（250世帯）	必需品の検討
	家庭	■ 防災訓練への参加	全世帯実施（250世帯）	
	家庭	■ ブロック塀等の補強 危険箇所把握（屋根瓦・石垣）	全世帯実施（要調査世帯）	市補助活用可
	家庭	■ 家屋の「耐震補強」	全世帯実施（130世帯）	「耐震診断」による家屋状況の把握 市補助活用可
	家庭	■ 家具類・電気製品類等の転倒防止対策	全世帯実施（250世帯）	市補助活用可
	家庭	■ ガラスの飛散防止対策	全世帯実施（250世帯）	
	家庭	■ 家族間の連絡方法の確認	全世帯実施（250世帯）	メール・ライン・ノクノ
	自主防	■ 防災資機材の点検・補充	年12回	可搬ポンプ
	自主防	■ 集会所の電気製品・家具類の転倒防止及び、情報収集対策（テレビ・ラジオ）	年12回	
	自主防	■ 消火栓・消火器及び防火水槽当の点検・維持管理	年4回	
	自主防	■ 地域住民（災害弱者）の『同居家族情報』（要援護・技能者等を含む）作成	年1回	
	自主防	■ 消防団・行政等、関係機関との連携・協力確認	年4回	
	自主防	■ 水（光月院倉庫と集会所に1.8tタンク5個・10tタンク3個備蓄）食料品の備蓄の入替	年12回	保存水・非常食備蓄

地図面



発表	✓避難状況の理解はマニュアルをもう一度確認をして全住民各地区に周知する。 ✓家庭としては避難時間の計測、全地区全戸数把握が必要でないかと思う。 ✓海のまち安全避難エリア、海のまち安全創出エリアも全住民の理解が必要じゃないかと思う。 ✓家庭で火災予防、消火器の常備は相当前にほとんどの地区でやってくれてると思うが、もう一度各区長を通して言ってもらいたい。 ✓懐中電灯やラジオの常備について、特に防災ラジオは市役所等にいけば安く手に入るため、必ずつけるように防災委員会で言ってある。 ✓家庭救急品の備えは、一般のセットだけでなく、個人の常備薬も各家庭では必要である。 ✓家族３日分の食料は家庭ではあると思うが、それと同時に防災倉庫の備蓄での確保を、防災委員会で話し合い、実施しているところもある。水の備蓄も各地区やっている。 ✓避難地と避難場所の確認だけではなく、管理をきちんとしないと避難地として使えない場合がある。 ✓ブロック塀のことは実際何もやっていない。各地区話し合いが必要であり、次の防災委員会に諮り、調査もやってもらう。耐震補強、家具類電化製品の転倒防止、ガラスの飛散防止も同じく調査が必要である。 ✓家族間の連絡方式の確認については、もう一度周知徹底していく。 ✓防災資器材の点検、これは各地区防災倉庫、この前点検したがびっくりするくらい揃ってるところもあるし、まだこれからのところもある。西浜地区は防災倉庫ができたので、おいおい中身を考えるということになっている。特に危機感を持っている小池地区、松原、大久保地区はすばらしいです。一か所にまとめず二か所にしてある。市の防災倉庫も３か所あり、内容は把握している。 ✓消火栓等の点検は、9月に大抵やってくれていると思う。１２月や３月にもやった所もある。 ✓消防団や行政との連携は各地区に無線があり、消防は５チャンネルで必ず最初合わせてくれているということで周知してある。各地区でチャンネルの区分けができている。 ✓リスクのある道路・建物の情報があったほうが良いと思う。 ✓地図への浸水範囲はあればいいが、津波到達までの時間が短いのに時間を示すと逆に安心してしまうリスクがある。それだったら浸水地域だけでここは必ず浸水しますというだけでいいのではないかという意見があった。 ✓地図には、地震による土砂災害についてのリスクを入れたらどうかということがあった。

◆加藤准教授コメント

八木沢地区は非常に意識が高い地域だと以前から思っており、既にマニュアルもあって素晴らしいと思う。今の議論や発表を聞かせていただいて、５つコメントがある。一つは、6月に大阪北部地震がありブロック塀がいっぱい倒れたが、地震でブロック塀が倒れて人が亡くなるというのは今回が初めてではなく、1978 年に仙台で地震があった時にブロック塀が倒れて子どもも含めて結構な人数が亡くなった。30 年経っ

ていてまた同じことになっている。今回の大阪北部地震を経験して危ないブロック塀がなくならないということだと日本社会大丈夫かなという気がするので、この機会に八木沢地区では危険なブロック塀をなくす、避難の障害となるようなブロック塀をなくすということを促していただくと良いかと思う。

それからマニュアルが整備されてはいるが、もう一度点検することが大切である。やっていることにはなっているが、果たしてちゃんと機能するか？機能するかどうかを再点検することが重要である。例えば先ほど避難場所の話が出たが、それ以外にも消火器が全部揃っている。でも使用期限があるので、いつのまにか期限切れになってしまっているということもあるため、それも含めて再点検が必要。

３点目は議論して出来上がっているマニュアルだが、まだ足りない部分もおそらくあるに違いない。そこについてももう少し議論を深める。例えば家庭用の救急用品の薬のようなものがあったと思うが、一般的なものではなく、年を重ねてくると人には必要ないが自分にとっては必要なものがある。地震災害であれば家に戻って薬を取ればいいが、津波の場合は流されるので家に戻れない。逃げる時に自分の体に必要な薬は持っていかなければならない。そのような準備が各家庭でできているかどうかも必要となる。それ以外にもいろいろ足りないことはあると思うので、今の水準に満足することなく議論を進めていただきたい。

４点目は地震だけで津波が来ない地域と津波が来る地域で備えがだいぶ違ってくる。今のマニュアルだとそこが明確ではない。津波が来ない所は受け入れる準備もしなくてはならない。もう少し有機的に結びつけることで地域全体としてもっと良くなる気がする。

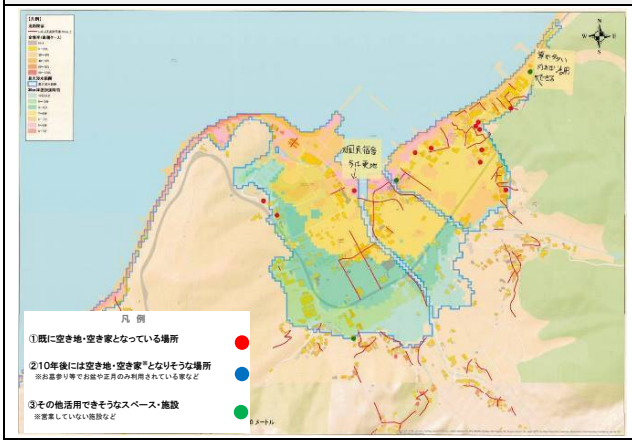
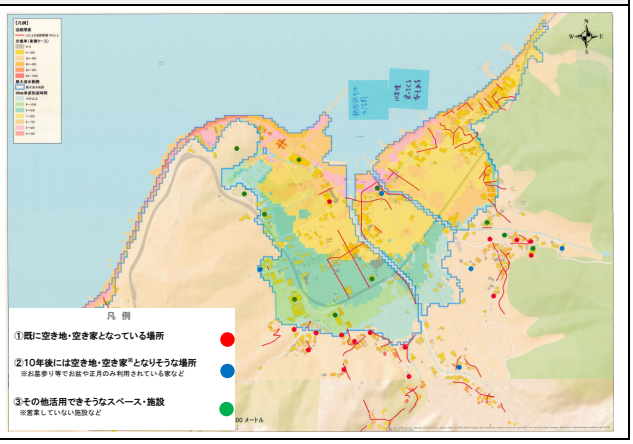
最後に先ほどこの新しい地図が出てきて、時間で色分けされている。２、３分の違いだから関係ないだろうというご意見もあったのだが、２、３分の違いだから実はすごく関係するかなと話しを聞いていて思った。というのも不動産屋さんの駅から５分というのはだいたい１分あたり８０ｍ。５分だと４００ｍだから、５分でこんなある。健常者が普通に歩いて５分だとこれだけあるので、２分違えば１６０ｍですから、これくらい違う。実は２分３分の違いが助かるかどうかに関係してくるような気がする。そういう意味では到達時間の数分の違いというのは実は重要なのかと思う。もう一度考えていただければと思う。

◆原田准教授コメント

皆さんのこちらの表を考えてもらったが、結局みんなが確認しなければならない、みんなが理解していなければならないという項目が結構あったと思う。だが、全員というのはハードルが高い。目標は高く掲げておくのはいいが、それをどうやって実現するかというのは、結構大変で今日ここでマップを作ったり使ったり、表の中で具体的に項目をあげてひとつずつ見ていったようなことを、各地区のみんなで集まってやってもらえば少しずつは広がっていくはずである。こういった地図の中に何が必要かを入れるのも、地図を見て話をしているとなんとなく、ここがどうなっているとか、こ

の道がどうなっているとか、通れない問題のある所がこの辺にかたまっている等が思いつくが、そういうのをうまく使いながら、計画があるだけではなくそれを生かせるような工夫を続けていければと思う。片方のグループでは通れない道、細い道が問題だ、または水路に水がすぐ上がってきてこの水路の水が上がってくると避難にすごく問題が出てくる、といった話が出てきていて、地域の中の課題を特にみんなで共有してそれをやるべき課題として認識して、地域のリスクとして把握していくというのは非常に重要だと思う。そのようなことを今日ここに来てくれた人以外ともやっていくことがこのリストの中でみんなで世帯全部がやらなければいけないことだとか、そういった所をハードル高く目標を上げたところをクリアするのに有効なのではないかと思う。この取り組みをうまく作っていけるといいのではないかと思う。

地域づくりを考えるための資源

ワーキング成果（八木沢①）	ワーキング成果（八木沢②）
	

（４）まとめ

◆原田准教授： 今日は二つのことをやった。一つ目は前半でやった地区防災計画、地区でどんなことをこれから取り組めそうかという目標をもう一回確認してもらって、皆さんのお住まいの地域でどういう風なことができて、または今後やらなくてはいけないかということが整理されたのだと思う。それを皆さんの地域で本当にやっていくというのが今後の課題。併せて今、地図の上で将来この地区の中でどんなことが起こるそうか、今現時点で空き家になっている所、地域の中で今後何かに使えそうな所があるかというのを探してもらった。地域の中でどんな状況かということは皆さんお住まいだからこそ、よくわかっているんだろうなというところで、ここは誰それさんの家というのもよくおわかりで状況がよくわかるんですけれども、それと併せて今日赤い線が書いてあったと思うが、赤い線は道路が使えなくなるかもしれないということで、空き家が倒れてきて赤い線が埋まってしまうというようなこともあるのだということも、改めて確認できると良かったと思う。また地域の人たちと議論していただくという場を拡大してやっていただくのが地域での防災取り組みとして重要だと思うので、引き続きこういった地域の皆さんが頑張る機会というのを取り組んでいただけ

たら良いと思う。

◆加藤准教授：ソフトは明日に備えて頑張る。それと共に中長期的に１０年くらいの時間をかけて確実に安全にしていく。この二つの視点で災害に備えるということが大切。ソフトのほうがやりやすい。ハードのほうは今すぐ何ができるか、行政の方も僕らもまだ見えていない。今回の空き家空き地の情報も含めて、現状を知った上で未来の可能性を皆さんと探っていけるといいと思う。

以上

１６　伊豆市“海と共に生きる”観光防災まちづくりを小中一貫校も考える会

（１）開催日時・会場・参加者数

日　時	会　場	参加者
平成 30 年 12 月 4 日（火） 13 時 35 分開始	びわっ子ホール	全校生徒 50 名 教員 10 名

（２）プログラム

項　目	当日の様子
開会・挨拶（伊豆市）	
土肥の観光防災まちづくり ●土肥地域の現状と課題 ●観光防災まちづくりに関する地域での取り組み ●小中一貫校の地区防災計画に向けて	
話題提供 ●観光防災まちづくりを進めるにあたって 東京大学生産技術研究所　加藤准教授	
グループワーク ●「観光防災まちづくりとして自分たちがやるべきことを考えよう！」	
全体発表	

項　目	当日の様子
まとめ	
閉会	

（３）開催結果

７年生１班

当日の様子	結果

【7 年生 1 班発表】

共生する

防災説明会を開いたらよいと思いました。観光としての避難タワーが用意できるのではという意見が出た。CM などを作り、さまざまな人にわかってもらえたらよいと思いました。外国人にもわかるように、外国語による説明もあるとよいと思いました。

逃げる

いつでもどこでも誰でも伝わる放送をしたらよいと思った。電柱に地図を貼り避難場所を書いたらわかりやすいのではないかと思いました。

生き延びる

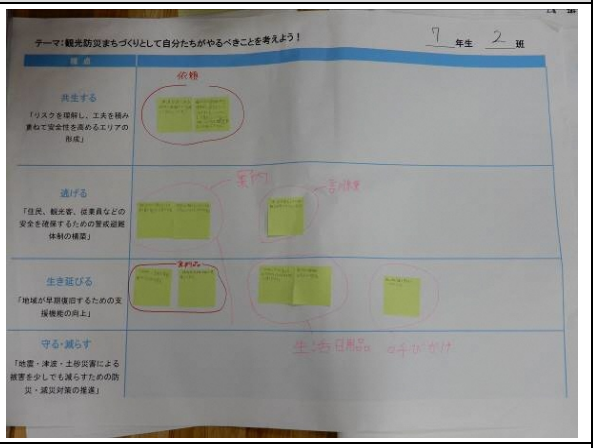
山を整備し、走って逃げられるようにしておくことは助かることにつながると思います。募金してもらい、日本人に援助してもらいたいです。災害時の救援では、自衛隊やボランティアに手伝ってもらいたいです。避難準備として、食料を保管する場所が

必要です。

守る減らす

砂防ダム・防波堤・避難タワーをもう少し作ってもらえたら良いかなと思いました。

7 年生 2 班

当日の様子	結果
	

【7 年生 2 班発表】

共生する

政府などに依頼し、津波が早く来る場所に避難タワー等を建ててもらい、より年寄りの人たちに優しく登りやすくすることで、生存率とかも高くなるのではないかと思いました。さらに地震時、土肥地区では道路閉塞確率 70%以上のところがたくさんあるため、道路を壊れにくく、閉塞されにくくすることで、山の方からは救急車が来やすくなり、焦って車で逃げる人が逃げやすくするためにはこのようなこともする必要があると思った。

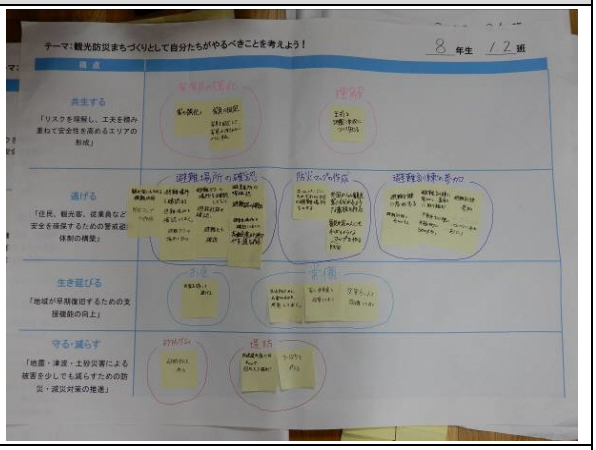
逃げる

安全な所に旗をたてて安全な場所を見やすくする。その旗を英語などの言語で大きく書けば、外国人の方にも安全な場所を案内できるのではないかなと思いました。安全な場所をわかりやすくするでは、安全な場所にラインなどを引き、ここが安全であるサインになればよいと思いました。津波避難訓練をたくさん行えば、参加者に身について逃げる時に迅速にできるのではないかと思いました。

生き延びる

避難所に食料品の保管庫に用意したり、保存食を各家庭で用意する。ただ、食料品を保管している家庭は少ないと思われるだめ、避難所の保管が重要になる。懐中電灯やLED も、同様の理由で避難所への設置が必要です。他の地域への支援の呼びかけをすれば、救急車もすぐに対応してくれて、けが人が少なくて済むと思いました。

8 年生 1,2 班

当日の様子	結果
	

【8 年生 1,2 班発表】

共生する

家や家具を強化したり、地震や津波について理解する。

逃げる

避難訓練に参加して、避難場所の確認をしたり、観光客や外国人にもわかるように防災マップや看板を作る。

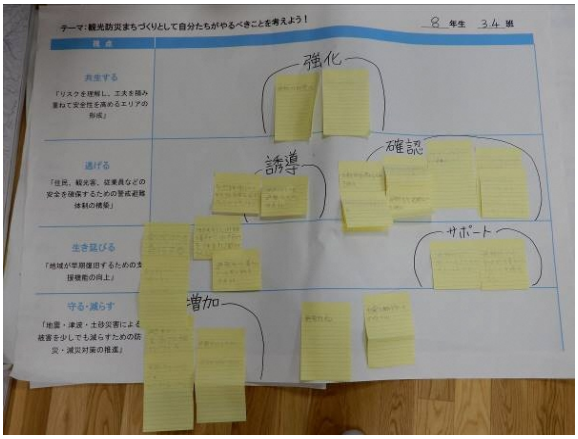
生き延びる

お金を貯めたり、生活するために必要なものや非常食を常備しておく。

守る減らす

砂防ダムや堤防を作り、安全になるようにする。

8 年生 3,4 班

当日の様子	結果
	

【8 年生 3,4 班発表】

共生する

建物の耐震化や建物の中の家具などの耐震化、避難ルートや山道の整備をしてできるだけ安全に逃げられるようにする。

逃げる

実際に起こった時、自分達が避難所へお年寄りの方を誘導出来るようにしておく。ハザードマップを作ったり、避難経路の看板を作ったりして事前に皆が確認しておけるようにする。

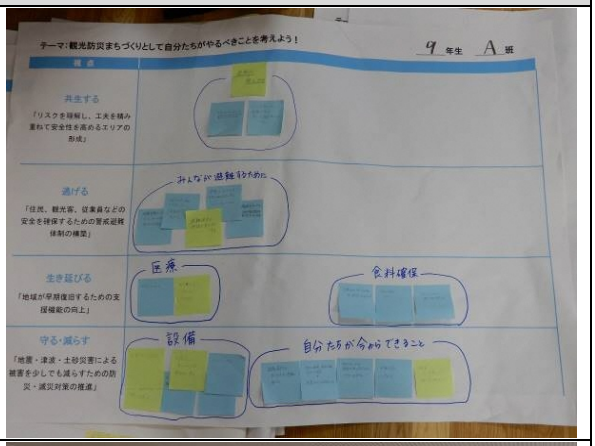
生き延びる

非常食などの、避難所での暮らしに必要なものを常備しておく。避難所で困っている人をサポートする。大変そうな人を優先するということをする。

守る減らす

避難タワーを各地にもう少し多めに作る。砂防ダムなどを作り、土砂崩れなどから安全に逃げられるようにする。電柱が倒れたりすると逃げにくくなるので、無電柱化により出来る限りそういった物を減らす。

9 年生 A 班

当日の様子	結果
	

【9 年生 A 班発表】

共生する

避難所と観光施設両方のことを考えながら避難タワーを作る。

逃げる

皆が安心して避難できるように、グローバル化が進んできて沢山の外国人がきているので、英語で避難地図を作ったり、避難時のマークのようなものを作り、避難時の参考になるといいなと思いました。

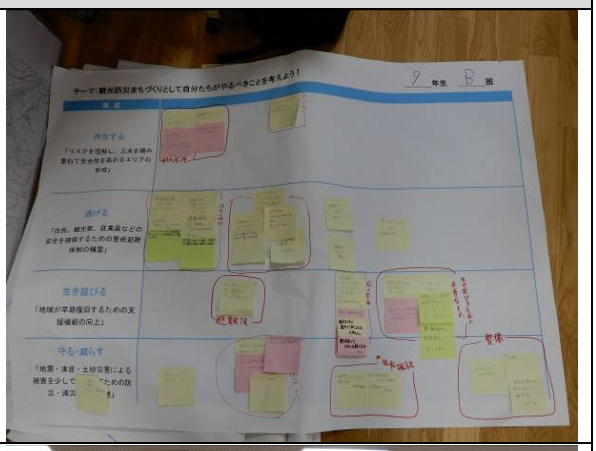
生き延びる

病院自体がそもそも少ないのでもう少し増やせたらいいなと思います。食料確保という面では公園のベンチに非常時に食べるものが入っているものもあるらしいので、そういうものも土肥地域に取り入れられればよいと思いました。

自分たちが今できることは、医療の知識の少ない中高生も応急処置のやり方を勉強して少しでも多くの人を助けられたらいいと思いました。放課後に持久走の練習で持久力をつけ、しっかりと沢山の人を避難させられたら。将来良い仕事について、こういうことに使えるお金を寄付できたらいいと思いました。

今から僕たちにできることも沢山あると思うので意識してしっかりとやっていけたらと思います。

9 年生 B 班

当日の様子	結果
	

【9 年生 B 班発表】

共生する

避難タワーなどを作り、それを観光資源として活用できればよいと思います。

海＝津波だけでなく観光に生かすことができるよう、海に触れ合ってもらうことで海に対する意識を向けてもらい、海について知ってもらって、海を守っていこうという防災意識を高めていけるようにできるとよいという意見がでました。

アンケートをとることで、住んでいる人の意見もしっかり反映してはどうかという意見がでました。

逃げる

避難場所の確認についての意見が最も多くありましたが、避難経路を指示する時に、文字だけでは海外の人には伝わりづらいため、絵や記号や数字で表現という意見やハザードマップを回覧するという意見がありました。

高齢化が進んでいるので、近くに逃げるのに困難な人とコミュニケーションをとっておくことで、逃げたかの確認をとるようにすれば安全性が高まるのではないかという意見が出ました。

生き延びる

道路整備がスムーズな避難につながるのではという意見がでました。保存食、生活必需品を人の数に合わせて＋観光にくる人など、どのくらい必要なのかを全体

で把握しておくことが大切。避難所での生活をどうすれば良いか。簡易式なものはどういう風につかえばよいのかわからない人がいるかもしれないため、避難した後の生活の訓練もやっておくとよいと思いました。
さらに、避難困難者を把握して名簿を作っておくことで、呼びかけがしやすくなり、より生き延びることができるのではないかと思いました。

（４）まとめ

静岡大学　原田先生

みなさんができることもあったし、こうしてもらいたいなという意見もあった。
みなさんができなくても、役場の方やいろいろなところにお願いすることで、地域を安全にしていくことはできると思う。
英語で外国人に土肥のことを知ってもらう。防災のことも知ってもらう必要がある。
土肥の主要産業である観光、土肥の魅力であったり、地域のことを英語で紹介できるとよいと思う。
いろいろなことを工夫しながら、今日挙げてもらったものをまとめ、みなさん自身ができることをまとめた計画を作ってもらって、実際にできるようにしていけるとよい。
今日やったことを次につなげていければよい。

PTA　野毛会長

みなさんが観光防災まちづくりについて考えているということに対し、わたしたちも襟を正し、土肥の観光業に努めていきたいと思った。たいへん感動した。

東京大学　加藤先生

限られた時間での議論だったと思うので、時間を見つけて議論を続けてほしい。
共通していたのは避難タワーを作るにしても、目的を複数にして普段にも使え、災害時に役立つ、そういうものが必要というのが共通していたかと思う。今の国の仕組みだと複数のものを作るのは難しい。そういった日本の仕組みを変えていければと改めて思いました。
グローバル化を目指し、土肥小中一貫校の８年生、９年生は英語で避難を呼びかけられるとよい。
今日の発表はこうあるべきだという内容が多かったが、自分達でできることは考えればもっとある。
例えば、ここは指定避難場所になっており、逃げてきた大勢の人がしばらく生活することになる。この学校施設に一番詳しいのはみなさん。避難所の案内や運営のお手伝いができる。自分達にできることを膨らませていけるとよい。
せっかく小中一貫校なので、ここで議論したことを次の学年に伝えていければ

非常に強い土肥地域になるのではないかと思う。
これから目指すべきは“なまはげ”。年１回全ての家庭訪問して家族しか知らない秘密を指摘する。子どもにとっては怖い。年１回全ての集落の暮らしぶりを確認しにくる。そのついでにこの家には足の悪いおばあちゃんがいるなどを同時に確認する。結果的に防災に役立つ文化になる。そういった取り組みがこの地域の常識になって、最終的にはこの地域の文化として知らず知らず定着していく。そういうことを目指していくと良いと思う。
土肥地区の中で津波の危険性やどこに逃げたらいいかをわかってない人にきちんと正しい知識を伝えて正しい備えを知ってもらう。そういうことも中学生ができることであると思う。自宅と津波の関心のない人の家に、是非「みんなで取組む　観光防災まちづくり」ののぼり旗をたててほしいと思う。

以上